

目次

要約	2
序章 子ども時代をどうとらえるのか	4
第1章 中学生の成長・発達	18
1. 成長・発達の変化	18
2. データでみる「中学生の成長・発達」	21
第2章 学校	37
1. 中学校をめぐるこの10年の動き	37
2. 中学生にとっての学校	40
3. 教師の悩みと指導力	52
第3章 家庭	57
1. 家族の変化	57
2. 父親と中学生	60
3. 日本の母親——日本と韓国との比較から	64
第4章 社会の変化と中学生	68
1. 社会の変化・この10年	68
2. 10年間のデータをふり返って	70
第5章 逸脱行動	81
1. 最近の逸脱行動の推移	81
2. この10年間の逸脱行動	85
3. まとめ	109

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。



調査レポート

50号記念 アルマナック中学生

〔監 修〕 深谷昌志（静岡大学教授）

〔執筆分担〕

- 第1章 三枝 恵子（埼玉県立小川高等学校教諭）
井上 健（純心女子短期大学専任講師）
- 第2章 田中 統治（筑波大学助教授）
亀沢 信一（東京都稲城市立稲城第五中学校教諭）
- 第3章 深谷 野亜（上智大学大学院生）
長嶋 安男（石神井服飾専門学校教頭）
- 第4章 永井 聖二（群馬大学教授）
- 第5章 内山 絢子（科学警察研究所主任研究官）
森 永徳一（東京都足立区立足立第三中学校教頭）
伊藤 澄生（東京都練馬区立開進第二中学校教諭）

要 約

この特集号は過去の『モノグラフ』の結果を要約したもので、もとの数値はそれぞれの号を参照してほしい。

第1章 中学生の成長・発達

① 体験

中学生が過去に体験したことは少ない。それも「自然の体験」だけでなく、「人間関係の体験」や「リーダーの体験」などもそれほど多くはない。（p. 23 表1-1）

② 自分への自信

中学生たちは、「両親がいなくても1人で暮らしていける」などの多くの項目で自信を持っていない。（p. 26 図1-3）

③ 家の手伝い

「食器を流しへ運ぶ」以外は、ほとんど手伝いをしていない。男子はむろん、女子の手伝い率も低い。（p. 33 図1-9）

第2章 学校

④ 授業の理解度

授業を全部理解できる生徒は5%程度で、半分くらいしかわからない生徒が半数に達する。(p. 44 表2-2)

⑤ 成績と未来像

学業成績のよい生徒の将来は明るい、スポーツが得意でもそれほど将来には影響をしない。(p. 49 図2-5)

第3章 家庭

⑥ 子どもへの心配

父親たちは非行の心配はしていないが、進学に不安を抱いている。(p. 63 図3-4)

⑦ 子どもの意味

韓国と対比すると、韓国の母親は子どもについて「家(名)を継ぐ」を大事に考えているが、日本の母親は「子どもの成長を楽しみにしている」者が多い。(p. 64 図3-5)

第4章 社会の変化と中学生

⑧ つきたい仕事とつける見通し

通訳やプロスポーツの選手などにつきたいと思う割合は高くない。つけそうもないとあきらめている生徒が多いからであろう。(p. 78 図4-6)

⑨ 流行語を持ち込む子

流行語を持ち込む子は服装のセンスはよいかもしれないが、生活はきちんとしていないし、勉強も得意ではない。(p. 80 図4-8)

第5章 逸脱行動

⑩ 悪いことか

「万引きをする」のは悪いが、「靴のかかとをつぶしてはく」のは悪くないなど、生徒の規範感覚はそれほど崩れていないようにみえる。(p. 90 図5-7)

⑪ 逸脱行為の実行度

「パーマ」や「万引き」などの逸脱行為をしている生徒は少ない。しかし、「ゲームセンターへ行く」生徒は半数に迫る。これを規範感覚の崩れとみるかどうかは微妙だ。(p. 91 図5-8)

⑫ 異性との交際

異性とききたい気持ち強いが、「プレゼントの交換」や「電話での話」などがしたいことの上位を占める。(p. 95 図5-10)

〔全体として〕

中学生たちが素直で健全な規範感覚を身につけ、異性とのつきあいにも節度を持っているのがわかる。そうした意味ではよい中学生だが、学校に充足感を持たず、自信のないままに、将来に夢を抱いていないのが気になる。「おとなのようで聞き分けがよいが、覇気が感じられない」のが中学生の平均した姿になる。

なお、本モノグラフの次号で10年前と比較して、中学生の変化を対比させる調査結果を明らかにする予定なので、その号も参照してほしい。

序章 子ども時代をどうとらえるのか

—国際比較の中で—

静岡大学教授
深谷昌志

1. 豊かな情報化社会の中で

この『モノグラフ』では中学生の姿を概観しようとしている。われわれ中学生問題研究会の同人が手がけてきた調査の中から、ここ10年のデータにしぼって、中学生の行動や意識を解明したいと考えている。

しかし、それに先だって、中学生たちの前身、つまり、子ども時代がどうであったのかを考えてみたい。もちろん、子どもについても考察を深めていこうとするとそれなりの枚数が必要となるので、国際的な比較の中で日本の子どもたちの姿を位置づけてみよう。

子どもを対象とした国際比較調査を行いたかったのは20年以上昔になる。日本の子どもたちの世界から地域差が消え、都市の子ども山村の子ども同じような成長をとげつつある。過疎の村に生まれてもそれほど成長の妨げにならないという意味では、地域差解消の効用を積極的に評価したいと思う。しかし、どこの子も同じように成長しているので、成長のしかたに歪みがあっても見つけにくい。そうした思いから、他の社会に育つ子を鏡にして日本の子どもの成長をとらえてみたい。そう考えて国際比較調査を試みることにした。

そういうと簡単のように思われるが、語学の専門家でもない者がほとんど一人きりでいくつかの国を対象とした調査をしようとするのであるから、実現に至るまで多くの失敗を重ねた。韓国の調査だとハングル、中国は北京語のようにそれぞれの言語への翻訳が必要になるが、そうした問題は日韓や日中の言葉に精通している人の協力を得ればなんとかなる。

しかし、学校に調査を依頼するのにどういう接近をしたらよいのかは社会によって異なるので当惑した。アメリカのように学校を訪ね、誠意を持って頼むと協力してくれる社会がある反面、上から接近しないとけんもほろろの社会もあった。また、金銭提供が問題解決の近道の社会も存在した。そうした苦勞を重ねながら1988年から4回にわたって比較調査を行い、1994年は国際家族年を念頭において「家族と子ども」の調査を実施した。そして、現在は「子どもにとっての教師」の意味を深めたいと、サンパウロやシカゴなどを調査候補地として、5回目の調査の準備を進めている。

国際比較調査をしていると思わぬ結果が得られて驚くことがある。

表1にテレビ視聴についてのデータを示し

た。表が示すように、どこの社会かを問わず、現代の子どもを象徴するのはテレビとのつきあいであろう。子どもたちはテレビと接しながら成長していく感じになる。

もちろん、テレビのチャンネル数や子ども番組の時間帯などは社会によって異なる。イギリスやフランスのように、チャンネル数が少なく、テレビの放映時間も短く、子ども番組そのものが少ない社会もある。それに対しアメリカではチャンネル数も多く、24時間体制でテレビが放映されている。ケーブル・テレビ（pay・テレビ、有料テレビ）を含めると、アメリカの子はいつでもアニメが見られる感じがする。

そしてデータの面でも、表1のように、ハルビンを除くと、テレビが一家に2台以上ある「テレビのパーソナル化」時代を迎えている。特に、ストックホルムやサクラメントの

ように、のんびり子ども時代を過ごしている社会ではテレビの視聴時間が長い。それと比較すると、日本の子どもの視聴時間は短い。勉強があるので、見たいテレビをがまんしているのであろう。

いずれにせよ、現代ではどこの社会の子ども「テレビ育ち」をしている。これまで、子どもたちは子ども時代に直接体験の世界で暮らし、成長するにつれて間接体験を持つようになるといわれてきた。しかし、これから、間接体験の中で成長する子どもが増加する。そうした子どもは物知りだけに、教育のシステムもこれまでの知識を伝達する形の学校からの転換が必要になる。そう考えると、情報化された環境の中で育つ子どもをいかに教育するのは、社会の差を超えて共通に取り組む課題のように思われる。特に、情報を取捨選択できるような判断力の養成が求められよう。

表1 テレビの所有台数と視聴時間

	東京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
1台	15.7%	67.7%	12.6%	12.2%
2台	41.5	29.4	26.2	48.1
3台以上	42.8	2.9	61.2	39.7
視聴時間	1時間38分	22分	2時間14分	2時間23分
毎日見る割合	67.3%	25.1%	72.2%	84.7%
昨日テレビを見た子	90.1%	61.3%	87.4%	95.1%

○は最大値
—は最小値

こうした情報化と同時に、「豊かな社会での成長」は現代の子どもを語る時の枕言葉になりつつある。しかし、国際比較調査を行ってみると、日本の豊かさを再確認させられるようなデータに出会う。

図1は勉強機の所有率を示している。日本では勉強機があるのが当たり前だが、こうしたデータを見ると、勉強機を持っていない子が多いのがわかる。

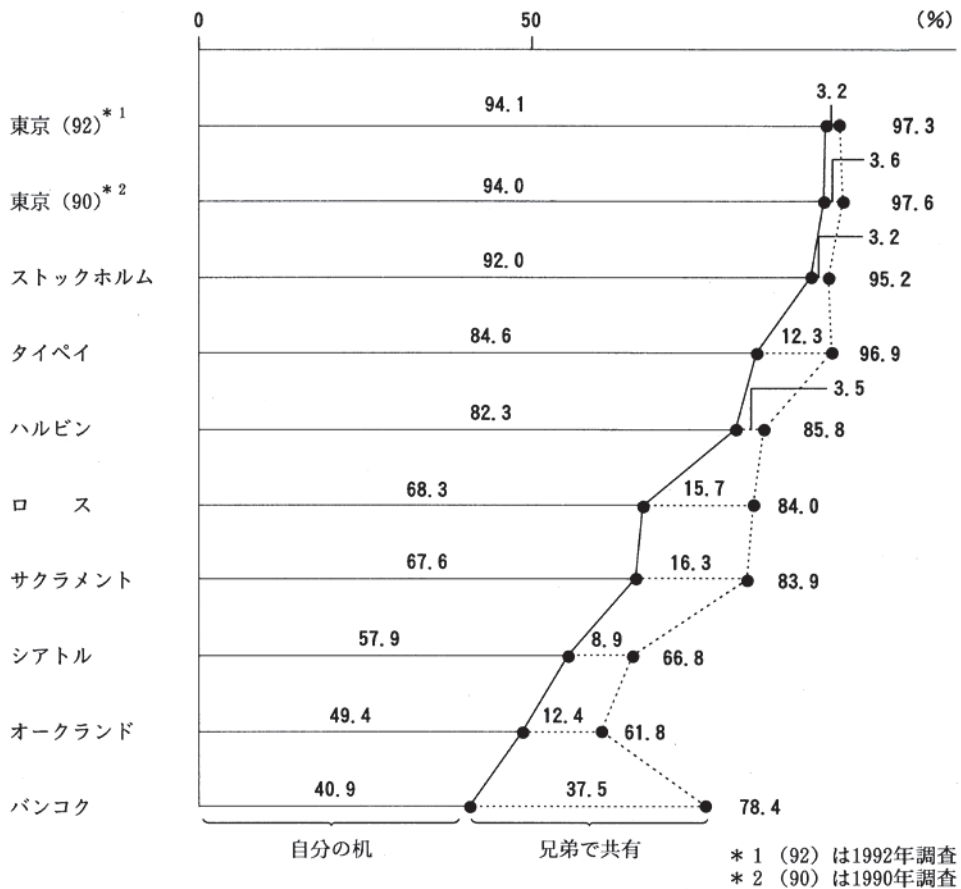
みかん箱を逆さにして机の代わりにしたなどといっても、多くの読者は意味がわからないと思う。しかし明治や大正はむろん、昭和でも子どもの記録に目を通していると、「生活の貧しさ」が書かれていることが多い。勉強機がないのでみかん箱を利用したなどとい

うのは軽い方で、食べ物がない、学校に行けない、働きにでるなどの記録が少なくない。

豊田正子の『綴方教室』は第2次世界大戦前の教育実践を代表するものの1つだが、東京の下町に住む人たちの生活苦が作品の底流に感じられる。また無着成恭の『山びこ学校』は、見方によると、東北の山村の子どもが書き綴った貧しさの記録の傑作である。また、映画化されたこともある『にあちゃん』も筑豊炭田に住む女の子が貧しさに負けずに健やかに育っていく記録である。

したがって、日本もほんの少し前まで貧しかったのは確かだが、日本が豊かな社会の仲間入りをしてから20年以上が過ぎ、子どもも含めておとなも豊かさに慣れてしまった気持

図1 勉強機を持っているか



ちがする。

もっとも、アメリカの場合、調査は中産階層の白人の多い地域で実施したので、勉強機の所有率の低さは貧しさが原因というより、子どものうちは机は不要とのもの見方についての文化的な違いを示すと考えられる。

アジアを旅すると、貧しさのために学校へ行けない子に出会う。それだけに「豊かさ」を子どもの健やかな成長に結びつけたいと思う。

2. 家庭の中の子ども

1994年は国際家族年で様々な行事が行われたが、残念ながら日本での国際家族年はやや

低調の印象を受けた。もっとも、他の社会では家族が深刻な状況を迎えている。特に、欧米では親の離婚や再婚で、家庭に安住できない子どもが増加している。それだけに、国際家族年に寄せる思いは深かったといわれる。

具体例を朝食にとって、それぞれの社会の家族の姿を概観してみよう。日本でも朝食をとらずに登校してくる子どもが少なくないといわれる。そして、孤食は望ましくないとの指摘もなされている。しかし表2によれば、日本の子の「欠食率」や「孤食率」は他の社会と比べると、それほど高くはない。というより、むしろ低めである。

実際に、アメリカの欠食率の高さは、親たちの離婚により家庭が崩壊し朝食を食べられ

表2 朝食の様子

(%)

	欠食率	孤食率	自分の家で食べた割合	給食その他
サクラメント	12.6	32.9	79.6	7.8
オークランド	8.0	38.6	89.5	2.5
ストックホルム	5.3	34.3	94.2	0.5
ソウル	5.1	15.0	93.9	1.0
バンコク	3.5	36.8	84.2	12.3
タイペイ	1.7	18.2	84.6	13.7
東京	1.4	18.6	97.7	0.9
ハルビン	1.2	24.5	98.2	0.6

○は最大値

ない子の存在を示している。例えば、調査地点の1つ、サクラメントの校長の話ではほぼ4割の子が親の離婚を体験していた。そのため、朝食を食べられない子のために学校で給食を用意する「ブレックファースト・プログラム」が展開されていた。ストックホルムの孤食率の高さは北欧の朝食が簡単なので家族が集まる慣習が少ないためと聞いたが、ストックホルムの離婚率は5割を上回っていたので欠食率の高さに家庭の崩壊が関係しているとみていいのではないか。

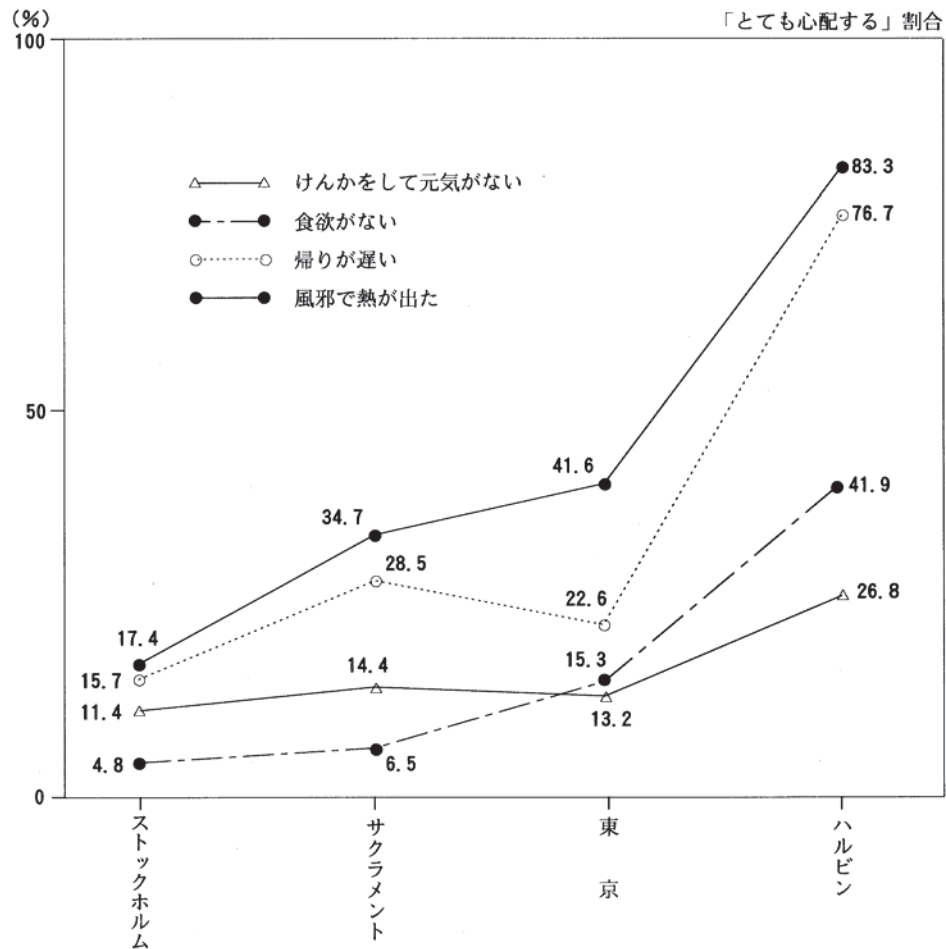
日本より状況のよくない社会があるから安心しようという気持ちはないが、少なくとも日本の朝食の風景は、いわれているほど悪く

はない。

図2に「けんかをして元気がない」「食欲がない」などのときに親が心配するのかを尋ねた結果を示した。これは親子関係の心理的な結びつきの強弱を尋ねたものだが、ここにもそれぞれの社会による開きを感じられる。

ハルビンは一人っ子政策がとられているので、子どもが「小皇帝」のように保護され、日本以上に過保護状況が生まれたといわれる。また、ストックホルムでは北欧風という言葉が適切かどうかはともあれ、手厚い福祉の実現された状況の中で、日本とかなり異質な、血のつながりの薄い淡白な家族関係が増加している。そして、サクラメントはカリフォルニ

図2 親が心配するか



アの州都で、現代のアメリカにしては治安の安定したよきアメリカが色濃く残っている町だ。それだけに、離婚率の高さのわりに家庭の雰囲気は安定していた。

表3に子どもが何かをしたとき、親が心配するのかを示した。それぞれの社会による違いを反映して、ハルビンでは親が何事につけても心配しているのに対し、ストックホルムの親は子どもの「食欲がない」「帰宅が遅い」などがあってもあまり心配をしない。

全体としてストックホルムの家庭は、日本人の目からすると親子がべたべたしていない。というより、親子がそれぞれに生活をし、子どもが親から自立している印象を受ける。そ

れに対し、ハルビンの家庭は親子が仲むつまじく暮らしており、かつての日本の家庭を見る思いがする。

家庭の教育力が低下しているといわれることが多い。しかし、家庭の崩壊の進む欧米を視野におくと、日本の家庭はかなり安定しているように思われる。

父親に人間的な優しさが増し、それと同時に母親に社会的な権威が備わって、父と母とが2人3脚をしながら子育てをする形が定着している。したがって、欧米に比べると家族に起因する児童問題は少ない。

日本人は伝統的に子どもをかわいがる文化を持つといわれる。日本社会が貧しい頃には

表3 親が心配するか

(%)

		東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム	
けんかをして 元気がない	心配 {	とても	13.2	26.8	14.4	11.4
		かなり	25.7	34.3	21.3	24.3
	小 計	38.9	61.1	35.7	35.7	
食欲がない	心配 {	とても	15.3	41.9	6.5	4.8
		かなり	29.5	35.5	11.4	7.2
	小 計	44.8	77.4	17.9	12.0	
帰りが遅い	心配 {	とても	22.6	76.7	28.5	15.7
		かなり	35.1	12.7	21.7	23.9
	小 計	57.7	89.4	50.2	39.6	
風邪で熱が出た	心配 {	とても	41.6	83.3	34.7	17.4
		かなり	37.2	9.6	36.9	31.8
	小 計	78.8	92.9	71.6	49.2	

○は最大値
—は最小値

そうした愛情が子どもを健やかに育てる源であった。しかし、そうした愛情の強さを残したまま、日本が豊かになってしまったので、子育てにあたって過保護の状況が生まれやすい。

考えてみると、親たちは貧しい時代の日本で育ったので子育てはうまい。しかし、豊かな社会における子育ては苦手のように見える。

具体例として「家事」を考えてみよう。表4から明らかなように、それぞれの社会で家事を手伝う割合は異なる。しかし、その中で日本の子の家事を手伝う割合はきわめて低い。他の社会では「皿洗い」や「部屋の掃除」などをそれなりに手伝っているのに、日本の子はほとんど何もしない感じで、「毎日手伝っている」子は多くても5～6%にとどまる。

したがって、日本の子は親に保護された環境の中で、勉強をする以外は、子ども部屋を親に掃除してもらい、家事を手伝うこともなく、テレビを見るかマンガを読むかする毎日を送っている。

家庭が安定しているのはいいが、もう少し子どもを突き放してみる態度が必要のような気がする。

3. 子どもと学校

国際比較を行ってみると「学校」のあり方に社会による違いは認められるが、基本的に学校は共通した性格を持つ。教室に教師、教科書、教科、学級などは、どの社会の学校にも認められる。そうした意味では「学校」という機関は国際的な性格を持つのかもしれない。

詳しい数値は省略するが、教科についての好き嫌いを尋ねると、教科の中でいちばん好きなのが体育、次いで音楽、好きになれないのが算数という傾向は、どの社会にも共通している。どの社会でも、子どもは拘束されるのが嫌いで、身体を動かし、声をあげるのが好きなのであろう。

表5は学業成績についての自己評価を示している。表中の数値に目をとめてほしい。日

本の子の中で、成績が「とても」「かなり」よい（と思う）割合は18.3%にとどまる。そして、ほぼ6割の子どもは自分を「ふつう」くらいの学力と思い、残りの4分の1は成績がよくないと感じている。正直に言って、成績についての自己評価はこういう分布になるものと信じていた。しかし、10年以上前にアメリカを訪ねたとき、子どもたちが成績に自信を持っているのを知って驚いたことがある。

実際に今回の調査でも、アメリカの子の中で成績に自信を持つ子の割合は73.0%に達した。客観的にみると、アメリカの子の学力はそれほど高くはない。しかし、少なくとも子どもたちは自分の成績に自信を持っている。

日本人は控えめに自己を語るのを常としているので、日本人からするとアメリカ人たちは自分を誇張してアピールする国民のように見える。したがって、表5の結果もそうした国民性の現れととれなくもない。

しかし、表中の数値によれば、ストックホルムの子の成績に対する自己評価も69.7%と高い。なお、これまでに実施した調査結果を参照するなら、オークランド（ニュージーランド）の子の成績に対する自己評価は63.4%（とても+かなりよい）、バンコクは46.5%であった。

したがって、成績に対する自己評価が明るいのはアメリカの子だけでなく、どこの社会の子も自分を肯定的にとらえている。考えてみると、つねに目を外に向け、元気に走り回るのが子どもなのであろう。そうした意味では、日本の子のように成績を客観的にとらえることのできる見方は成熟しているともいえるが、子どもらしくないとも考えられる。それだけ、子どもたちは学業にこだわっているのであろうか。

表6は、成績のよしあしが子どもの自己評価にどれくらい影響を及ぼすのかを示している。成績が「とてもよい」を分母、「ふつう」を分子にとったC/Aに着目してほしい。

C/Aが100.0に近づくと、成績がよくない（ふつう）子の自己評価がよい（とてもよ

い) 子の評価と比べ、ほとんど変わらないことを意味している。それに対し、C/Aの数値が小さくなるにつれて、成績に自信を持っていない子の自己評価が自信を持つ子の評価より低くなることを意味する。

表中の数値によると、サクラメントやハルビンの子は成績がふるわなくても自己評価は低下していない。しかし、日本の子は成績が

低下すると、「スポーツの得意さ」や「正直さ」「親切さ」などについても自分に自信を持ってなくなる。つまり、学校というより学業成績のよしあしが子どもの心に重くのしかかっている。そして、成績に自信を持っていないと自己評価が低下するのが日本の子の特徴になる。

表4 家事の手伝い（毎日する割合）

(%)

	東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム	オークランド	バンコク	ソウル	タイペイ
洗濯	1.7	3.5	6.5	1.0	4.4	9.7	3.2	2.1
夕食の買い物	2.4	6.4	7.1	2.4	7.3	8.5	10.2	8.9
庭や玄関の掃除	2.7	6.0	3.6	1.3	3.2	11.3	—	—
部屋の掃除	4.3	17.8	19.3	4.5	19.3	22.0	30.3	11.0
皿洗い	5.0	18.6	13.4	4.3	31.0	28.1	7.5	5.8
夕食の手伝い	6.4	4.5	15.8	2.7	13.7	7.6	6.6	7.6

○ は最大値と2位
— は最小値

表5 成績の自己評価

(%)

	よ い		ふつう	よくない	
	とても	かなり		やや	とても
東 京	5.8	12.5	55.8	18.6	7.3
ハルビン	3.9	32.6	48.4	13.5	1.6
サクラメント	28.3	44.7	23.6	2.8	0.6
ストックホルム	22.6	47.1	27.9	1.6	0.8

表 6 自己評価 × 成績

(%)

	東京				ハルビン				サクラメント				ストックホルム			
	ととも よい(A)	かなり よい(B)	ふつう (C)	C/A	ととも よい(A)	かなり よい(B)	ふつう (C)	C/A	ととも よい(A)	かなり よい(B)	ふつう (C)	C/A	ととも よい(A)	かなり よい(B)	ふつう (C)	C/A
スポーツのうまい子	38.2	16.1	14.6	38.2	26.3	22.3	20.4	77.6	49.3	38.9	36.2	73.4	39.3	24.7	20.3	51.7
人気のある子	37.3	16.4	6.4	17.2	26.3	26.5	10.0	38.0	42.4	22.1	21.3	50.2	21.2	13.5	11.2	52.8
勉強のできる子	56.4	12.5	2.0	3.5	90.0	16.9	3.0	3.3	67.1	27.2	10.2	15.2	42.9	17.2	3.5	8.2
正直な子	31.4	10.2	8.1	25.8	65.0	59.9	47.6	73.2	49.3	33.6	29.1	59.0	43.9	27.8	18.7	42.6
親切な子	33.7	13.9	9.7	28.8	50.0	55.9	48.3	96.6	49.3	36.0	26.8	54.4	48.2	31.8	24.0	49.8
よく働く子	32.4	12.4	12.5	38.6	55.0	48.2	40.7	74.0	63.8	40.8	23.6	37.0	42.9	18.2	7.1	16.6
勇気のある子	38.2	15.7	16.5	43.2	65.0	40.7	27.5	42.3	40.1	37.8	39.4	98.3	46.4	27.9	27.3	58.8

注) 「ややよくない」 + 「とてもよくない」が東京は18.6% + 7.3% = 25.9%だが、ハルビン13.5% + 1.6% = 15.1%、サクラメント2.8% + 0.6% = 3.4%、ストックホルム1.6% + 0.8% = 2.4%なので、クロスでは「とてもよい」から「ふつう」の3段階とした。
○は最大値 — は最小値

4. 子どもの未来像

未来を夢見るのが子どもらしさだといわれる。子どもたちに「大きくなったら何になりたいか」と尋ねてみると、花屋、バスの運転手、ピアニストや外交官などの回答が返ってくる。もちろん、子どもたちの希望は社会によって異なる。例えば、ニュージーランドの子は羊を治療する獣医、韓国の子はコンピュータの技師、アメリカの子は大統領や判事のように、いかにもその社会らしい職種をあげる子が少なくない。

表7はそれぞれの社会で子どもにつきたい仕事を書かせ、その上位5種をまとめた結果である。他の社会では医師や裁判官などの社会的な達成を望む子が少なくない。それに対し、日本の子は小学校教師やマンガ家などを望む子が多い。

そこで表8に目を通してほしい。これは、

「幸せな家庭を作る」や「仕事で成功する」「お金持ちになる」などについて、「きつとされる」と思う割合を示している。

全体として、サクラメントの子は将来に明るい見通しを抱いている。そして、ハルビンの子は社会主義の国の子らしく、「お金持ちになる」のはむずかしいかもしれないが、「幸せな家庭」や「仕事での成功」は可能だと思っている。またストックホルムの子は「有名人になる」「仕事での成功」はなれそうもない（なる気はない）が、「幸せな家庭を作る」のは可能だろうという。

詳しく考察すると、表8の項目は「社会的な達成」と「家庭的な幸せ」とに分かれている。そして、アメリカの子は社会的な達成と家庭の幸福とをともに求めているのに対し、スウェーデンの子はいかに福祉社会の子らしく、社会的な達成を求めずに家庭の幸福を追求しようとしている。

スウェーデンを訪ねたとき、「生活の質」

表7 つきたい仕事（上位5種）

(%)

	東京		ハルビン		サクラメント		ストックホルム	
1	プロスポーツ選手	45.1	警察官	30.4	芸術家	38.9	プロスポーツ選手	40.0
2	小学校教師	41.6	芸術家	29.1	医師	37.6	テレビタレント	35.3
3	大会社の社長	38.3	医師	28.2	プロスポーツ選手	36.6	プログラマー	26.9
4	自営業	35.1	裁判官	25.2	裁判官	35.5	自営業	24.1
5	マンガ家	33.7	テレビタレント	22.8	小学校教師	31.3	獣医	22.5

(Quality of Life) という言葉をくりかえし聞いた。豊かでなくとも、充実した生活を送りたい。確かに、北欧の暮らしは質素という言葉に近いが、時間がゆっくりたっていく感じで、人間らしい充足した気分を味わえそうな生活だった。

そう考えてくると、データの背後にそれぞれの社会の生き方が見えてくる思いがする。

このように他の社会の子は明るい未来像を抱いている。そうした中で、日本の子の反応は社会的な達成はむろんのこと、家庭的な幸せも望みにくいと思っている。子どもたちに「大きくなったら何になりたいか」と尋ねると、「(特) べつに (なりたいものはない)」と答える子が多い。そうした反応に慣れてしまっているが、本当は慣れてはいけないの

表 8 将来の見通し

(%)

		東 京	ハルビン	サクラメント	ストックホルム
有名人になる	きっと	11.0	31.7	28.1	18.9
	たぶん	14.6	43.4	26.8	19.1
	小 計	25.6	75.1	54.9	38.0
皆から好かれる人になる	きっと	12.3	56.2	40.8	32.3
	たぶん	48.6	41.7	41.4	51.7
	小 計	60.9	97.9	82.2	84.0
お金持ちになる	きっと	12.7	6.6	37.8	18.6
	たぶん	21.3	29.7	34.6	21.2
	小 計	34.0	36.3	72.4	39.8
仕事で成功する	きっと	19.1	59.5	78.8	27.2
	たぶん	40.2	35.2	18.4	43.1
	小 計	59.3	94.7	97.2	70.3
よい父(母)親になる	きっと	26.5	61.8	76.4	62.1
	たぶん	47.0	33.0	14.7	33.5
	小 計	73.5	94.8	91.1	95.6
幸せな家庭を作る	きっと	40.7	68.7	83.3	72.0
	たぶん	37.4	28.5	12.8	23.2
	小 計	78.1	97.2	96.1	95.2

○は最大値
 —は最小値

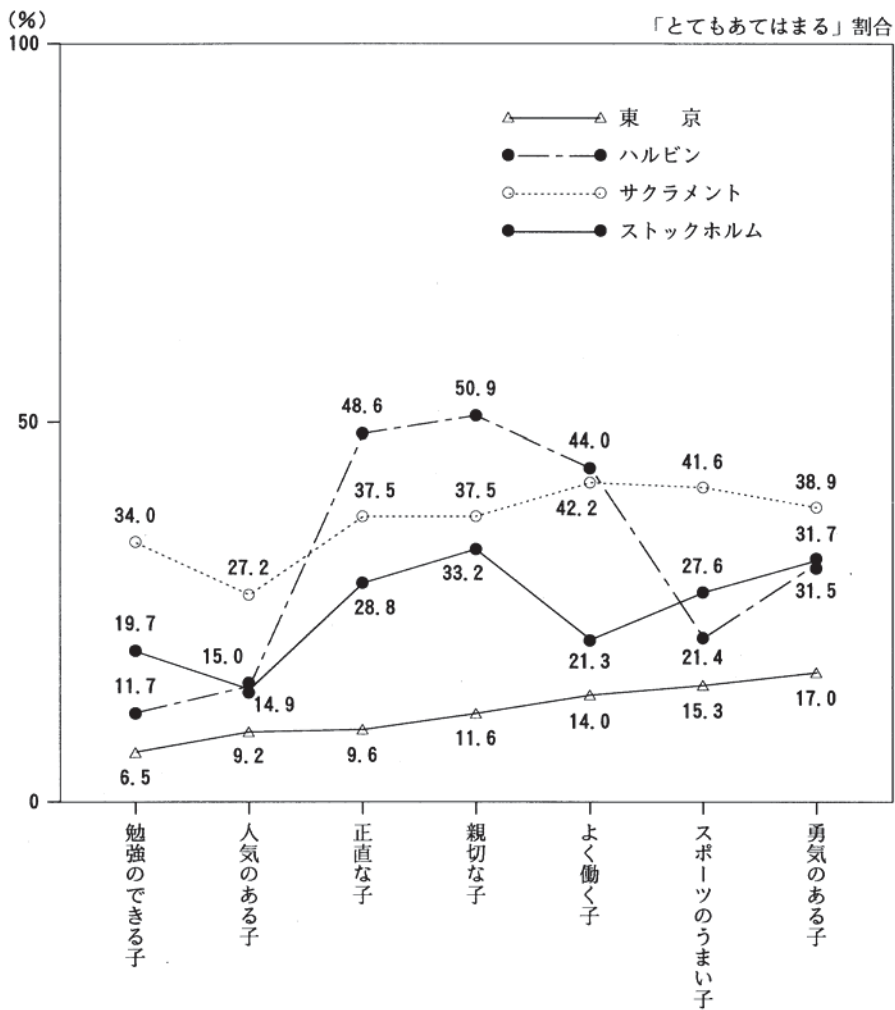
ではと思う。つまり、日本の子は大きくなってほしいことはできそうにないと、未来に夢を抱いていない。先にふれた学業成績の重みが、子どもたちの未来に対する夢を奪ってしまうのであろうか。

図3に子どもたちの自己評価を示した。ハルビンやストックホルムの子は現在の自分に自信を持っているのに、日本の子の自己像は

低く、「正直な子」や「親切な子」などについて自信を持っていない子が多い。

将来に夢を持つためには、自分に対して自信を持つことが必要であろう。現在の自分に自信を持つことができなければ将来を語れないのはいうまでもない。将来に夢を持たせようとするなら、その前に、子どもたちに自信を抱かせることが必要であろう。

図3 自己評価



5. 子どもと性差

国際比較調査を行っている、調査時点である程度予想がつくデータと思わぬ数値が得られて驚くことがある。思わず考えさせられたそうしたデータの1つとして、性差に関連する結果を紹介しておこう。

表9は女子に結婚後の人生設計を尋ねたものだが、日本を除く他の3都市では「結婚しても仕事を続ける」が女子の反応の3分の2を超える。これに「子どもを持たずに働く」を含めると、ハルビンでは100.0%、ストックホルムの87.0%が「仕事派」になる。

それに対し、日本の女子の「結婚したら仕事をやめる」割合は61.2%に達する。つまり他の社会の女子は「結婚後も仕事を持つ」生

活を予定しているのに対し、日本の女子は専業主婦の生活を未来に予定している。

なお、将来の生活についての男子の反応をまとめると以下の通りとなる。

ハルビン	4.8%
ストックホルム	19.2%
サクラメント	38.3%
東京	60.5%

(「専業主婦になる人と結婚したい」割合)

日本では、女子だけでなく男子も専業主婦の妻を望んでいる。それに対し、アメリカやスウェーデンでは男子も専業主婦の妻を望まず、夫婦共働きの生活を予定している。

欧米では「母親の就労」＝フルタイムで、パートタイマー形は少ない。それに対し、日

表9 女子の結婚観（女子）

	(%)		
	結婚しても 仕事を続ける	結婚したら 仕事をやめる	子どもを持たずに 働く
東京	32.2	61.2	6.6
ハルビン	84.8	0.0	15.2
サクラメント	67.4	21.6	11.0
ストックホルム	82.3	7.9	4.7

(ストックホルムは「結婚しない」が5.1%)

本ではパートタイムで働く母親が増加している。家事・育児と仕事を両立させる道をパートに求めたのであろう。したがって日本は欧米と比べ、専業主婦文化が崩れていないといわれる。表9の結果にもそうした社会による違いが反映しているのであろう。

女子が専業主婦の生活を予定し、男子が妻に主婦の生き方を求める。これは価値観の問題であるので、欧米と日本のどちらの方が望ましいとはいいいにくい。ただ、仕事志向の女子を励ます必要があるように思う。

最後に表10に目を通してほしい。これは女子の自己評価が男子と異なるのかを示したもので、女子/男子が低いほど、女子の自己評価が男子を下回ることを意味する。

「勇気のある子」や「スポーツのうまい子」などについての女子の自己評価が男子よ

り低いのは予想できる。しかし、「親切な子」や「正直な子」の評価は女子の方が高いと思う。

そして、表中の数値によれば、他の社会の女子はほぼそうした反応を示している。ストックホルムのように、ほぼ全部の項目で女子の評価が男子を上回っている社会もある。しかし、日本の女子の反応はすべての項目で男子を下回り、「勉強」はむろん、「親切」や「正直」でも男子にかなわないという。

これまでふれたように、日本の子の自己評価が低かったが、その中でも女子の自信のなさが目につく。子どもたちに自信を持たせる、それを日本の教育の課題にしたいと強く思った。

<参考文献>今回使用したデータは「都市社会の子どもたち」(『モノグラフ・小学生ナウ』vol.12-4 ベネッセ教育研究所 1992.12)に詳しい。なお、国際比較調査のデータは「家族の中の子どもたち」(『モノグラフ・小学生ナウ』vol.14-4 ベネッセ教育研究所 1994.12)も参照してほしい。

表10 自己評価 × 性差

(%)

	東京			ハルビン			サクラメント			ストックホルム		
	男子	女子	女子/ 男子	男子	女子	女子/ 男子	男子	女子	女子/ 男子	男子	女子	女子/ 男子
スポーツのうまい子	20.4	9.8	48.0	29.7	13.4	45.1	59.8	24.0	40.1	15.9	38.9	244.7
人気のある子	12.4	5.8	46.8	17.9	12.3	68.7	32.3	22.2	68.7	10.8	19.2	177.8
勉強のできる子	9.4	3.6	38.3	14.6	8.9	61.0	33.9	34.3	101.2	17.4	22.2	127.6
正直な子	11.2	7.9	70.5	44.9	52.0	115.8	35.8	39.1	109.2	30.6	27.7	90.5
親切な子	13.1	10.1	77.1	49.5	52.0	105.1	33.1	41.8	126.3	30.5	36.0	118.0
よく働く子	17.6	10.1	57.4	40.7	47.1	115.7	41.4	43.1	104.1	23.2	19.7	84.9
勇気のある子	19.1	14.8	77.5	39.7	23.7	59.7	48.5	29.6	61.0	24.1	39.2	162.7

「とてもあてはまる」割合
○は指数が100を超える項目
*女子/男子 × 100

第1章 中学生の成長・発達



1. 成長・発達の変化

近年、子どもが変わったといわれて久しい。中学校の先生が語る中学生像は、

- ①指示には従うが、自らやろうとはしない
- ②苦しいことにはなるべくかわろうとしないし、すぐあきらめる
- ③他人のことは見て見ぬふり、つきあいは表面的で、友だちにも決して厳しいことは言わない
- ④教師への反発や反抗もなく、たとえ納得しなくてもその場は教師の指導に従い、「すみません」と引き下がる
- ⑤考え方が非常に幼稚であり生活者としての技術や知識はおぼつかないが、一部関心のあることの知識は専門的でありおとなより豊富である
- ⑥夜型の生活の定着と睡眠不足で疲れやすくとストレスがたまりやすい

などが共通した特徴である。今まで抱いていた子どもらしい中学生像ではなく、新人類的な、どこか疲れたおとなを思わせる中学生像である。このような中学生のほぼ共通した特徴をみると、子どもたちの成長・発達のスタイルが変化してきたのではないかとの思いを強くした。ここでは、そうした子どもたちの成長・発達の変化を成長・発達加速現象と子どもたちをめぐる社会状況の変化から追ってみることにする。

1) 成長・発達加速現象

成長・発達加速現象の第1は身長、体重、胸囲などの増加に代表される身体的成長加速と性機能の早期発現に代表される「成熟の前傾」がある。しかし、現代社会においては

「成熟の前傾」にもかかわらず、高学歴化社会の中で「社会的成熟」が引き延ばされ、身体的、社会的「成熟ギャップ」が拡大されていると指摘されている。

第2は、現代文明社会における様々な刺激により、心理的成長のアンバランスによる発達の変質が考えられる。

お読みになった方も多と思うが、アメリカのニール・ポストマンなどは、『子どもはもういない——教育と文化への警告——』（小柴一訳、新樹社、1985年）において、「テレビをはじめとする現代の新しいメディアが、大人の秘密をなくし、大人と子どもの境界線を取り払い、ついには『子ども期』という観念を消滅させつつある」と警告した。

彼の議論を要約すれば、次のようになる。子どもは、おとなが知っている一定のことを知らない人々の集団である。だから、おとなは子どもが知らないことを知っているから権威があり、子どもはおとなになるための学習が必要だった。おとなになるための学習は、なにも強制されることばかりとは限らない。子どもの頃の豊かな好奇心は、「知らなければ」と思っていることを「まだ知らないでいる」から「知りたがる」のである。ところが今日の情報化社会では子どもであるか、おとなであるかを問わずに、同じ情報を送り続ける。その結果、子どもたちは様々な情報を身近なおとなを介在させないでも得ることができるようになり、知識の面だけでおとな化が先に進んでいく。

また、デビッド・エルキンズも『急がされる子供たち』（久米稔他訳、家政教育社、1983年）の中で、現代社会は子どもたちを早く成長するように仕向けている。親・学校・マスメディアが子どもたちをおとな扱いし成長が加速され、そのため子どもは強いストレスを受けていると論述している。

さらに、マリー・ウィンはその著書『子ども時代を失った子どもたち』（平賀悦子訳、サイマル出版会、1983年）の中で、子ども時代の喪失が子どもの成長を歪めているとし、

子どもとおとなの境界線があいまいになり、子どものおとな化が進んでいると指摘している。

ポストマンやエルキンズらはいずれもアメリカの場合を論じたのだが、このことは「豊かな情報化社会」という点でアメリカと共通項を持つ日本にもあてはまるように思われる。すでに10年くらい前から、生活が豊かになり、都市化、情報化が進む中で、おとなと子どもの境界線が薄れていくのではないかという指摘がなされはじめている。

2) 社会状況の変化と子どもの成長

そうした成長・発達加速現象をもたらす社会状況の変化を子どもたちの発達の意味と関連させて考えてみたい。

・豊かな社会の中で

昭和30年代までの子どもたちは、貧しい生活の中で、学校に通い、家庭の仕事を手伝い、自分の努力なしにはほしいものを手に入れることはできないと知っていた。現代の豊かな社会では子どもたちは貧しさも不足感も味わうことなく、いつでも何でもほしいものが手に入る。親の十分な愛情を受け、与えられたままの生活は努力なしでも十分満足できる快適な生活であり、そうした生活態度は子どもたちの自発性を乏しくし、やる気を減退させる。

・情報化社会の中で

かつて、子どもたちは家庭・学校・地域の身近な人間関係を通し自然の中で直接体験の豊富な生活をしてきた。この20年、テレビを中心に子どもたちをとりまくマスメディアの情報量は急激に拡大してきた。現在、ラジカセ、テレビゲーム、ワープロ、ファックス、ポケベル、専用電話など情報機器に囲まれ、子どもたちはマスメディアを通じた間接体験の中に埋没し成長している。そうした生活の中で、子どもたちは情報の受容になれた受け

身の生活が身についている。

・高学歴化社会の中で

現在は、高校進学率は96%を超え、大学進学も短大等を含めると4割を超える高学歴化社会である。成績のよい子はもちろん悪い子もそれぞれのレベルで少しでもランクの上の学校を目指し受験競争に参加し、心理的プレッシャーを感じている。さらに、幼稚園、小学校と受験は低年齢化し、子ども全体が受験競争に巻き込まれる。その結果、子どもたちは学業成績にこだわり、成績のよい者は自分の将来に自信を持てるが、この層はわずかで、多くの者は自分の学業成績の結果にそれほど明るい夢を描けない。がんばったところで、自分の将来はだいたい見えてしまい、夢や希望、自信を喪失していく。

・都市化の進展の中で

子どもたちは友だちとの仲間関係を通して道徳心や社会的能力(技術)などを学び社会化され、精神的な自立心を養い自己形成していく。しかし、近年、子どもたちが友だちと群れて遊ぶ姿がみられなくなった。子どもたちの放課後の生活はテレビを見るか、マンガを読むか、テレビゲームをするか、勉強をするなど家の中で過ごすことが多い。また、受験勉強の激化により、小さい頃から学習塾やおけいごとに通う子が増えてきた。1994年11月に東京都生活文化局から出された「大都市青少年の余暇と自由時間に関する調査」によれば、小学校で、「現在、塾に行っている」子どもの割合は63.8%、「おけいごと」では82.7%であり、放課後、習いごとなど何もしていない子どもは2割にも達していない。自分が忙しいときは相手が暇で、自分が暇なときは誰かが忙しい状況の中で、まとまった遊び時間や友だちを持たない生活が当たり前となっている。

さらに、大都市を中心に子どものまわりから路地裏、空き地、小川などの自然が失われ、子どもたちから遊びの空間をも喪失させ、遊

びのスタイルを「群れ」から「孤立」へと変化させた。こうした環境により子どもたちは孤独な生活に慣れ、友だちを求める気持ちが希薄になり、身近な世界に人間的なつながりを見いだせず、マスメディアの中に人工的な友だち関係を求める傾向となっていく。

・少子化現象の中で

豊かな社会の到来により、家庭は生産の場から分離し、消費単位になり、子ども部屋や種々の快適な設備が整い、家庭の居心地はよくなった。さらに、「少なく生んで大事に育てる」という考え方が定着し、親たちは子どもの成長に十分な援助と注意深い様々な配慮ができる状況となった。また、家庭の中での父母の同質化が進み、父親は仕事中心から人間的な優しさを持ち家庭内での役割を果たし、母親は知的な面を持ち社会に積極的に参加するパートナー型の夫婦に変化してきた。こうした父母は優しく頼もしく、子どもにとっては理想の親であり、精神的に親を信頼し頼りきった生活を送るようになる。こうした親を持つ子どもたちは、中学生から高校生にかけての嵐のように反抗する子どもの姿を失い、長期間になだらかに反抗する新しい「反抗のスタイル」をもたらした。

子どもたちは居心地のよい家庭に安住し、心理的にも家庭や親に依存しきっており、おとなしく素直であるが、ビッグな親を超えようという意欲をなくし、どこか無気力なように思える。

3) まとめ

経済の成熟化や情報化、都市化された現代の社会は子どもの養育環境を変えてしまい、子どもが早くおとなになるよう成熟を促し、子ども本来の成長のプロセスから子どもらしさを奪い、子どもの発達に歪みを引き起こした。

しかし、いつの時代も子どもの誕生は100年前と比べ変化していない。変わったのは子

どもが成長する環境、すなわち社会のあり方である。

人間の一生にはそれぞれの年齢に応じ、他に変えられない意味を持った発達課題がある。おとなからみれば未熟であっても、子ども時代はその未熟さや不完全さを十分生きることが必要であるように。

おとなや社会は子どもをおとな扱いするのではなく、子ども時代をおとなから距離をおいた自然の形で、ゆっくりとした時間の流れの中で過ごさせる環境作りや子どもの自主性を尊重し見守っていく態度が必要ではないだろうか。

<参考文献>

ニール・ポストマン (Postman,N)
『子どもはもういない——教育と文化への警告——』小柴一訳、新樹社、1985年

デビッド・エルキンズ (Elkins,D)
『急がされる子供たち』久米稔他訳、家政教育社、1983年

マリー・ウィン (Winn,M)
『子ども時代を失った子どもたち』平賀悦子訳、サイマル出版会、1983年

村井潤一編『新・児童心理学講座 第1巻子どもの発達の基本問題』金子書房、1992年

2. データでみる「中学生の成長・発達」

これまでの『モノグラフ・中学生の世界』で取り上げたvol.13「中学生の生活体験」、vol.41「生活体験」、vol.26「中学生の食生活」、vol.32「中学生の友だち感覚」、vol.39「中学生にとっての読書」の5冊のデータの中から、「中学生の成長・発達の変化」を探っていきたい。

1) 生活体験に乏しい中学生

人間の成長・発達は日常生活の中での様々な「体験」によってもたらされる。「体験」といっても、様々な種類の体験がある。セミやトンボをとるなどの直接体験とテレビなどメディアを通じた間接体験に分類され、近年直接体験の減少と間接体験の増加が指摘される。ここでは、中学生の体験を「自然の体験」「生活体験」「生死の体験」「人間関係の体験」「リーダーの体験」「技術の体験」に便宜的に分類し、vol.13とvol.41の中から、それぞれの体験領域の典型的な項目を取り出し比較した。

まず、中学生の「体験」の実態についてみていくことにする。表1-1によれば、セミ

やトンボを「数えきれないほどとった」生徒は33.6%、「1度もない」者は11.5%、生まれたばかりの赤ちゃんを「1度も見たことがない」48.6%、死んだ人の顔を「1度も見たことがない」35.3%と、「自然の体験」や「生死の体験」が欠けている。vol.13と比較するとほぼ10年間でかなり減少していることがわかる。また、「リンゴの皮をむいたこと」が「数えきれないほどある」生徒は44.6%、「1度もない」者が4.9%、「洗濯物を干す」「食器を1人で洗う」「1人でご飯を炊く」などが「1度もない」生徒も3割未満と、「生活体験」さえもかなり欠けている様子が見える。

さらに、とっくみあいのけんかを「1度もしたことがない」者は40.8%、父親にぶたれたことが「1度もない」生徒も27.5%と、人間関係の体験も不足している。一方、「技術の体験」では、電子レンジで食べ物を温めたことが「数えきれないほどある」者は6割を超え、ワープロを日常的に使っている者さえ15%に達する。

図1-1は体験量を男女で比較したものである。男子は「生活体験」が、女子では「自

然の体験」「人間関係の体験」が不足している。表は省略したが、中学生になっても、さらに学年が上がっても、生徒たちの体験量はほとんど増加しないのも現状である。

体験の各領域は、「生活体験」は生活者としての自立能力を、「自然の体験」は生活圏の拡大と適応能力や問題解決能力を生み出し、「生死の体験」は人生の悲しみや喜びを教え広く人間の理解を促し、「人間関係の体験」は人とのかかわりの能力を養い、「リーダーの体験」は社会性を生み出すことに役立つと考えられる。

しかし、表1-1で示したように、現代の中学生の体験はそれぞれの体験領域でかなり不足している様相がみられる。これが今日の子どもたちの人間形成に様々な形で影を落としていると推測される。例えば、専門的な限られた知識は豊富だが日常的な生活者としての技術には無知であったり、表面的には従順だが人との深い人間的なかかわりは避けてしまったりする中学生が増えていることも体験不足が大きな要因と考えられる。

そこで、データの中から自己像と関連させ、「体験」が人間形成に与える影響を数値で追ってみたい。

図1-2は将来の見通しについて「どんな仕事につきたいか」を尋ねたものである。3分の2以上の生徒が望んでいる仕事は、

- | | |
|---------------|-------|
| ①知っている人とする仕事 | 78.5% |
| ②平凡なふつうの仕事 | 75.2% |
| ③決められたことをする仕事 | 68.9% |
| ④身体を使う仕事 | 67.2% |
| ⑤責任のない仕事 | 66.8% |

と、顔見知りの人と決められた平凡な仕事を身体を使ってしたいという。中学生としては

なんとなく覇気に欠け、将来に意欲を感じない。

では、そのような将来像を持つ彼らは、自分自身にどのくらい自信を持っているのだろうか。図1-3によれば、「たぶん」も含め「できるだろう」と答えた割合が過半数を超えたのは「ビルの5階までかけ上る」(71.2%)、「ホテルの火事でも逃げ出せる」(51.5%)くらいで、「夏の暑い日に2時間立ってられる」(27.7%)、「1日くらい絶食しても勉強ができる」(26.7%)などは3割以下である。ここでも中学生の自分に自信の持てない自己像がみえてくる。

そこで、様々な体験をトータルし、体験の豊かさと自己評価との関連を示したのが図1-4である。体験の豊かな生徒は「友だちが多く、将来に明るい期待を抱き、皿洗いをしてでも外国に行ける、2時間くらい立ってられる、自分の考えを主張できる」など意欲的で明るい自己像を抱き、生活のあらゆる面で自分に対し自信を持つようになる。すなわち、ポジティブな自己形成に好影響を与えていることがわかる。

都市化、情報化が進む環境の中で、現代の中学生たちは、かつての子どもたちが当たり前前に持っていた様々な実体験や直接体験を十分に積まないまま成長しているようだ。情報化社会の状況を考えると、メディアを通した新しい体験や間接体験が増えてきてもしかたがないように思う。しかし、中学生たちが体験のなさにより将来に閉ざされたイメージを持ち自分にも自信が持てない現状を考えると、彼らはきわめて特異な環境のもとで成長しているといわざるを得ない。

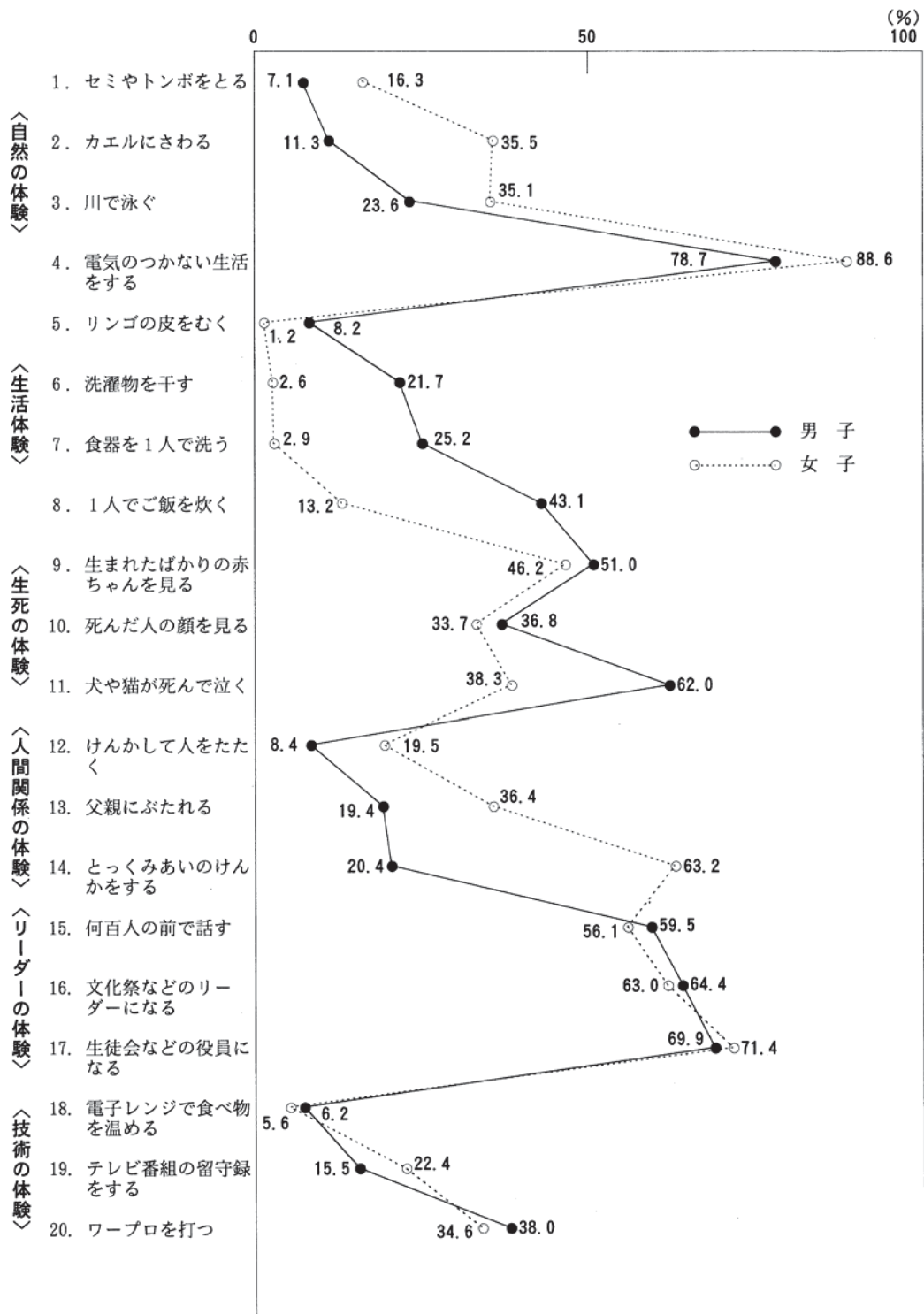
表1-1 体験

(%)

		1度もない	何回かある	数えきれないほどある	性	
					男子	女子
自然の体験	セミやトンボをとる	11.5 (5.2)	54.9 40.9	33.6 53.9)	7.1 (3.3)	16.3 7.1)
	カエルにさわる	22.8 (19.7)	56.4 48.5	20.8 31.8)	11.3 (5.5)	35.5 34.6)
	川で泳ぐ	29.1 (37.6)	60.8 49.9	10.1 12.5)	23.6 (29.0)	35.1 46.8)
	電気のつかない生活をする	83.4 (82.0)	14.7 15.7	1.9 2.3)	78.7 (74.9)	88.6 89.3)
生活体験	リンゴの皮をむく	4.9 (4.9)	50.5 52.8	44.6 42.3)	8.2 (7.8)	1.2 1.9)
	洗濯物を干す	12.5 (10.0)	61.4 58.9	26.1 31.1)	21.7 (17.4)	2.6 2.4)
	食器を1人で洗う	14.6 (17.9)	58.2 57.6	27.2 24.5)	25.2 (31.4)	2.9 3.6)
	1人でご飯を炊く	28.8 (34.9)	46.9 47.7	24.3 17.4)	43.1 (48.0)	13.2 21.1)
生死の体験	生まれたばかりの赤ちゃんを見る	48.6 (46.8)	48.0 49.9	3.4 3.3)	51.0 (50.5)	46.2 42.9)
	死んだ人の顔を見る	35.3 (45.0)	63.7 53.4	1.0 1.6)	36.8 (44.3)	33.7 45.8)
	犬や猫が死んで泣く	50.8 (42.4)	45.2 49.6	4.0 8.0)	62.0 (55.4)	38.3 28.7)
人間関係の体験	けんかして人をたたく	13.7 (12.5)	59.2 57.4	27.1 30.1)	8.4 (6.3)	19.5 19.1)
	父親にぶたれる	27.5 (21.5)	56.2 60.7	16.3 17.8)	19.4 (13.0)	36.4 30.4)
	とっくみあいのけんかをする	40.8 (39.0)	53.6 54.0	5.6 7.0)	20.4 (14.0)	63.2 65.4)
	何百人の前で話す	57.9 (57.7)	39.2 38.8	2.9 3.5)	59.5 (56.5)	56.1 59.0)
リーダーの体験	文化祭などのリーダーになる	63.9 (52.1)	34.2 44.0	1.9 3.9)	64.4 (52.7)	63.0 51.5)
	生徒会などの役員になる	70.7 (77.0)	28.0 21.6	1.3 1.4)	69.9 (75.3)	71.4 78.7)
	電子レンジで食べ物を温める	5.9 (-----)	33.7	60.4	6.2 (-----)	5.6 (-----)
技術の体験	テレビ番組の留守録をする	18.8 (-----)	38.9	42.3	15.5 (-----)	22.4 (-----)
	ワープロを打つ	36.4 (-----)	48.7	14.9	38.0 (-----)	34.6 (-----)

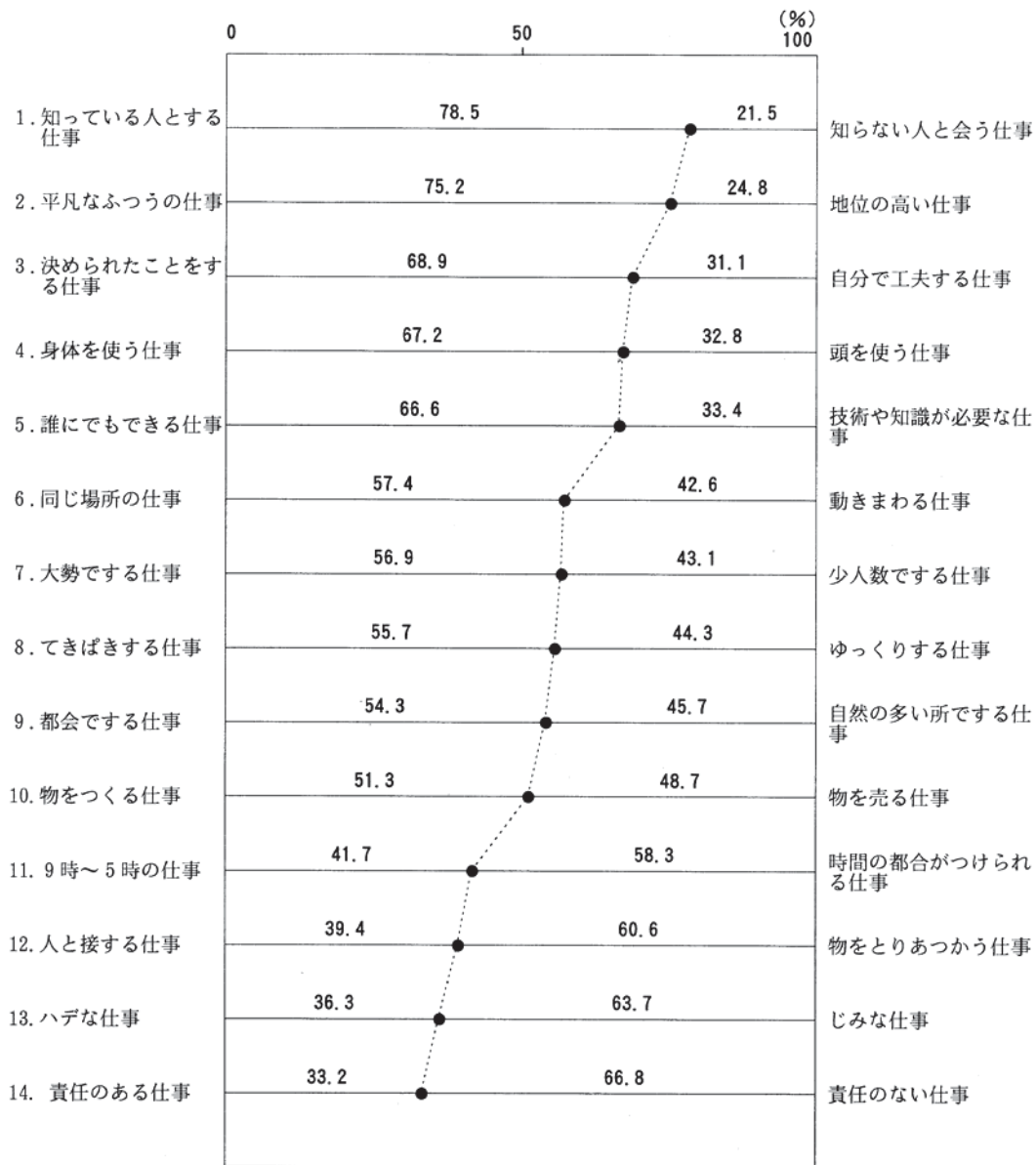
性別は「1度もない」割合
()内は vol.13 (1982年調査)の数値
(vol.41 生活体験「1991年調査」より)

図1-1 体験 × 性



「1度もない」割合
(vol.41 生活体験「1991年調査」より)

図1-2 仕事のタイプ



(vol.41 生活体験「1991年調査」より)

図1-3 自分への自信

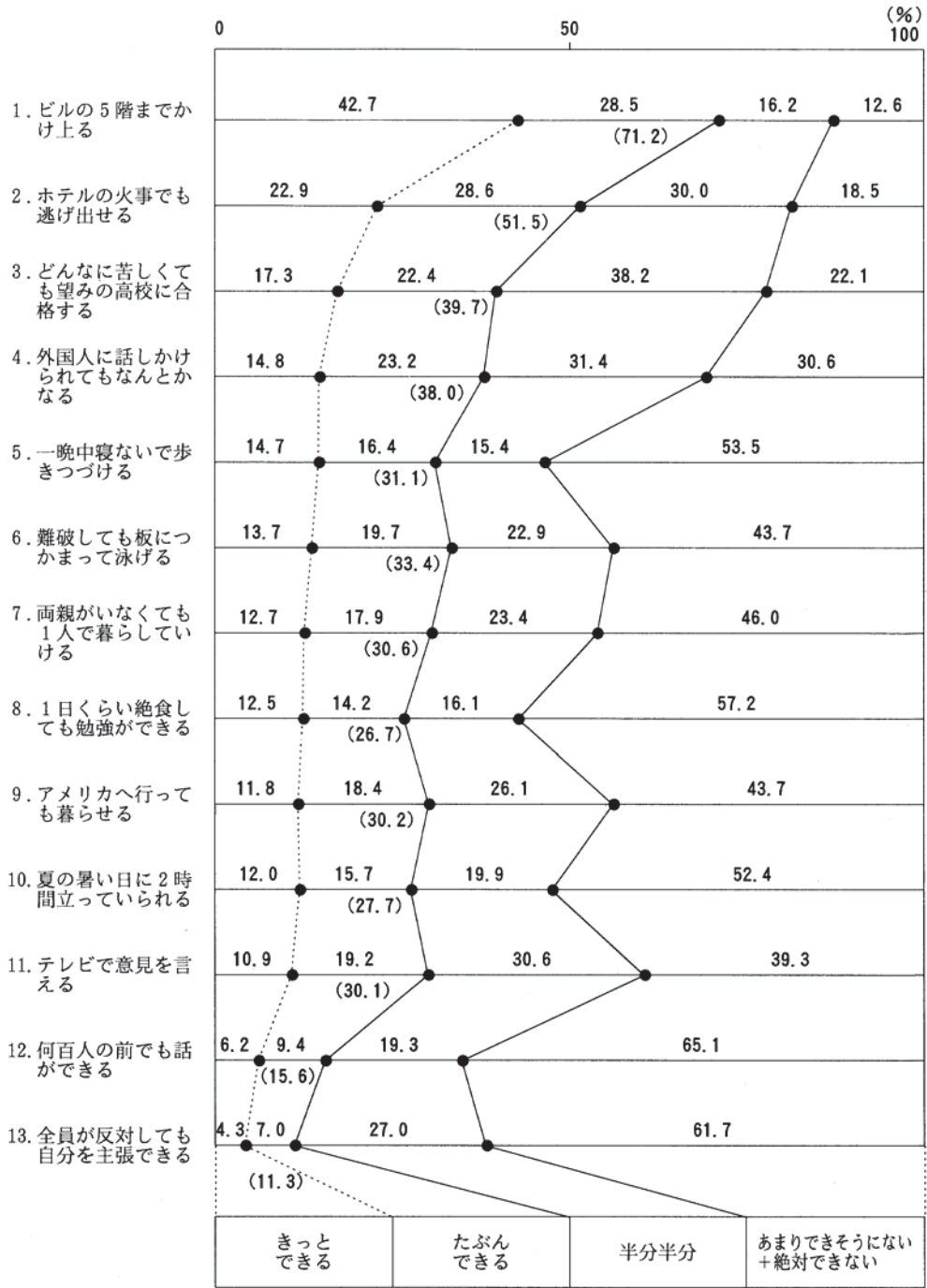
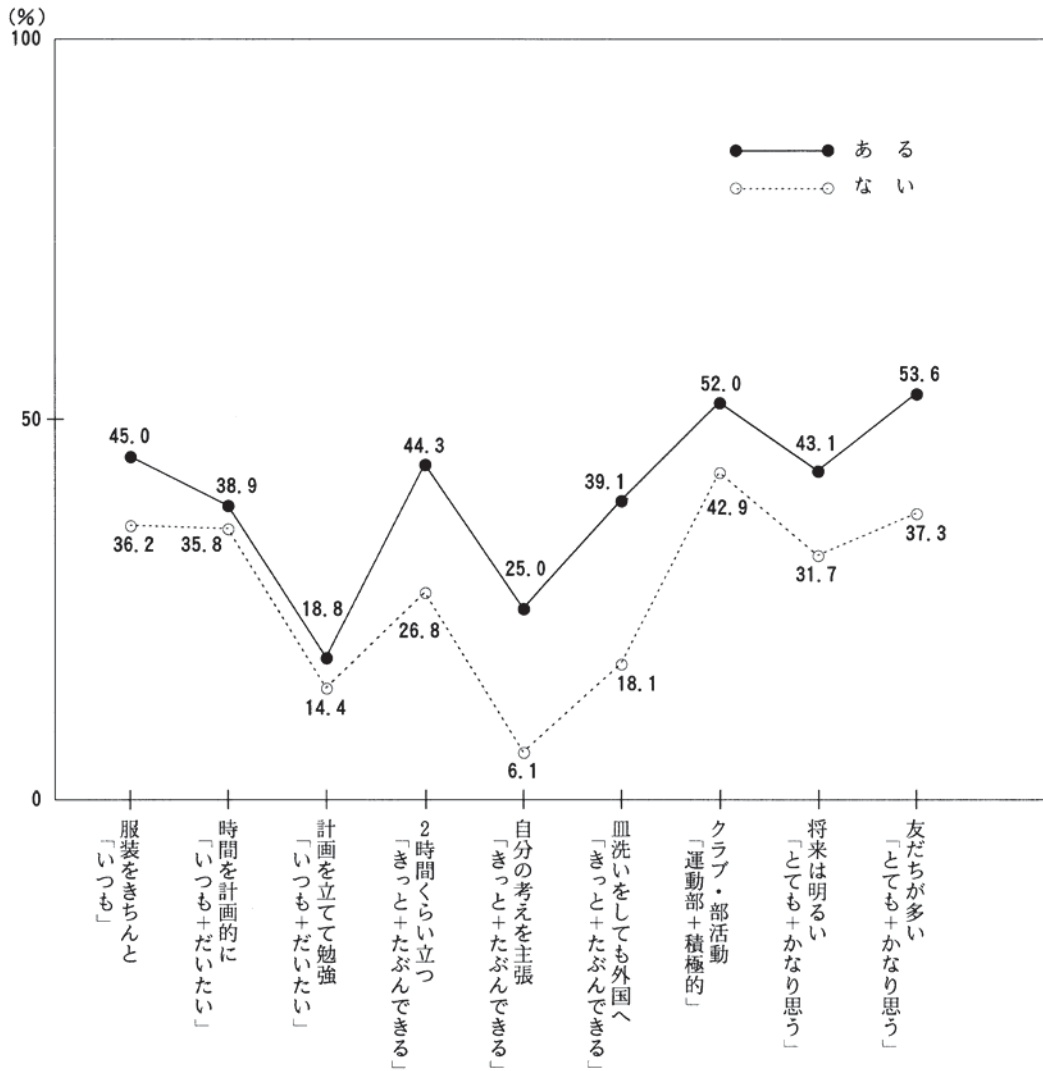


図1-4 体験トータル × 自己評価



(vol.41 生活体験「1991年調査」より)

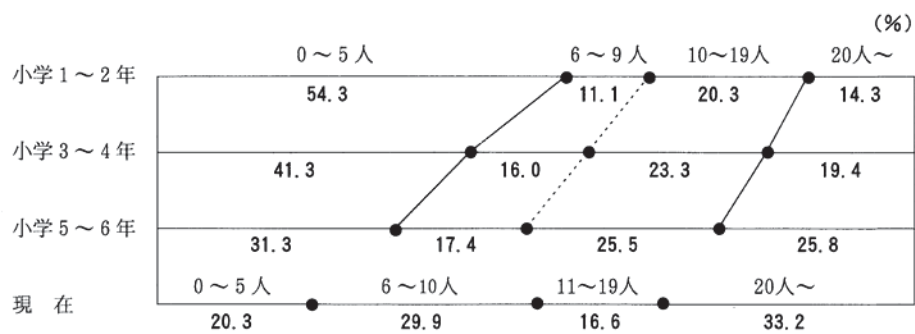
2) 友だちを持たない成長のスタイル

友だちづきあいが下手な中学生が増加している。みんなと表面的には楽しそうにつきあっているが、仲間どうしのつきあいは浅く、人間関係を深めた友だち関係を持ってないで

るといわれる。ここでは、友だちを通した発達スタイルをみてみよう。

図1-5は小学校からの友だちの数の変化を示した。中学生の親しい友だちの数は5人から20人以上まで幅広く、小学校時代に比べ友だちの数は増えている。図1-6より親しい友だちとしていることをみると、「いつも

図1-5 友だちの数の変化



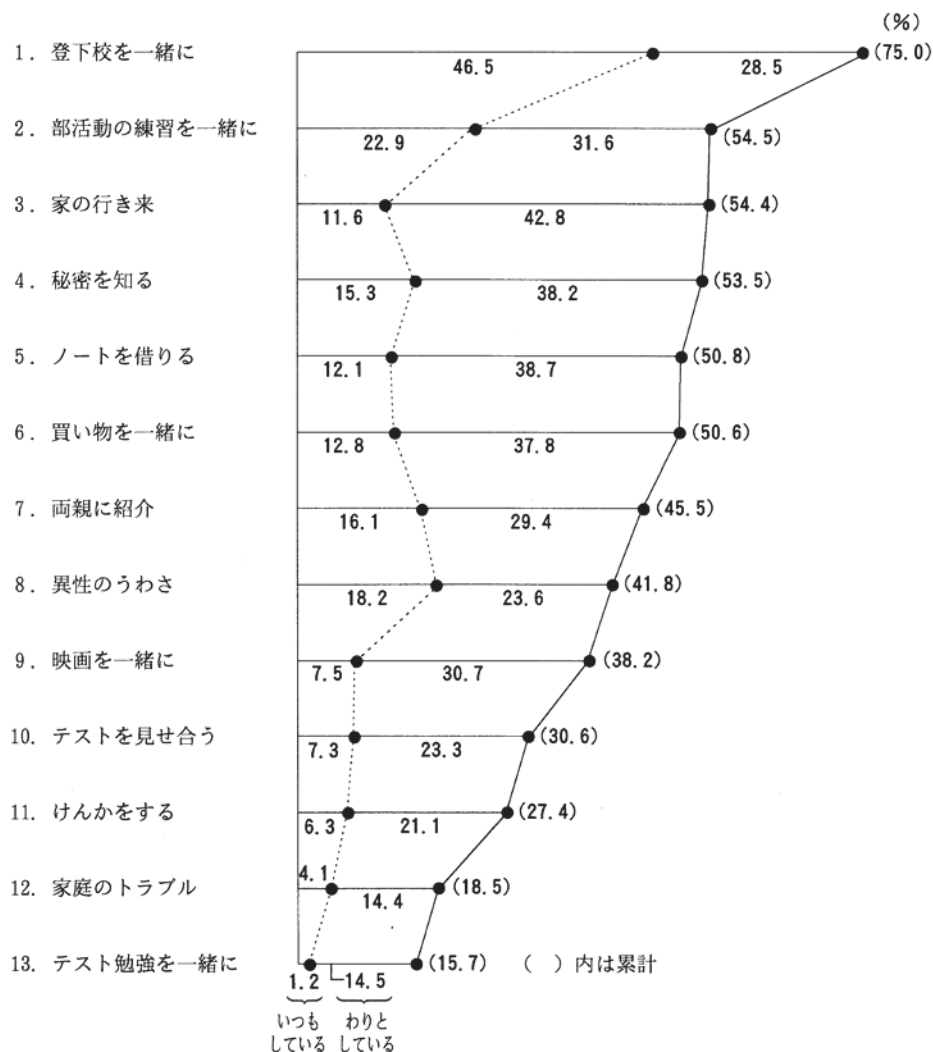
(vol.32 中学生の友だち感覚「1988年調査」より)

・わりとしている」割合は「登下校を一緒に」が75.0%と最も高く、次いで「部活動の練習を一緒に」(54.5%)、「家の行き来」(54.4%)である。また表1-2によれば、友だちと大事にしていることは「一緒にいると楽しい」「困っていることを話しやすい」「なんとなく気が合う」が上位を占め、友だちの数に

よる大きな違いはない。

中学生の多くは、友だちという言葉に「クラスの仲良しの子」を連想しているようだ。こうした友だちづきあいの姿は、おとなたちが会社の同僚ととりあえず表面的にこやかにつきあうのに似ている。全人的につきあうのではなく、時間を共有している間だけ、心

図1-6 親しい友だちとしてしていること



(vol.32 中学生の友だち感覚「1988年調査」より)

の奥底を隠しつつ、表向きをつくろう形である。

そうした見方を反映してか、図1-7によると、中学生にとって「よい友だち」とは、「誰にでも親切で、しっかりとした人、勇気があり、話を聞いてくれる人」である。図1-8は、「友だちにしていること・してもらっていること」を尋ねた。自分から友だちに対して「してあげる」より、どちらかという「してもらうこと」が多いようである。

いずれにしても、子どもたちのつきあいは思っているより浅く、表面的な印象を受ける。

長い間、子どもたちは友だちの中で成長するものと信じられていた。かつての子どもはその年齢に応じて、友だちの範囲を拡大しながら成長していくものであった。少子化傾向と都市化された空間の中で、ギャング集団を失い、群れ遊びをしなくなった現代の子どもたちは、家の中でテレビを見たりマンガを読んだりして日々過ごしているようである。ま

表1-2 大事にしていること × 友だちの数

	全 体	友だちの数			
		0～5人	6～10人	11～19人	20人～
1. 一緒にいると楽しい	62.0	61.6	64.8	62.2	59.7
2. 困っていることを話しやすい	57.7	61.3	59.5	63.8	52.0
3. なんとなく気が合う	40.4	41.5	43.4	40.0	38.7
4. 親切にしてくれる	41.0	39.4	40.5	46.2	39.4
5. 秘密を話し合う	21.5	22.1	20.2	22.8	21.2
6. 同じ部活動	19.7	16.4	20.6	17.6	22.7
7. 趣味が同じ	11.1	9.0	10.4	9.4	14.0
8. 成績が同じくらい	6.8	6.3	6.2	5.4	8.5

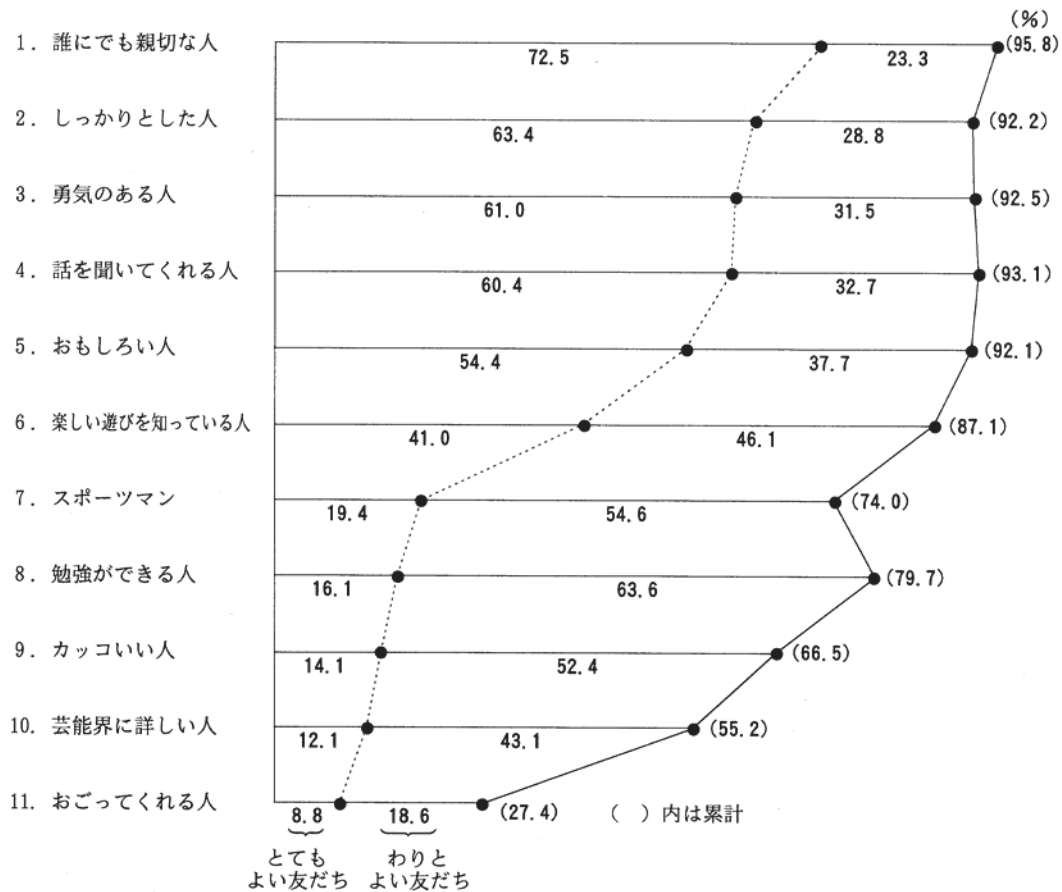
「とても大事」な割合
(vol.32 中学生の友だち感覚「1988年調査」より)

た、多くの知識や技術の修得を要求される現代において、親や教師に依存し、おとなの価値観を受容する過程が長くなり、屋外に出ていくのは学習塾やおけいごとのときだけとなってきた。こうした状況では、友だちを求めようとする心が育たず、孤独な子どもたちが増加し、寂しいときにはテレビやマンガを見、テレビゲームにチャレンジすることで心の空白を埋めている。そうするうちに、友だちを持たない状況に慣れ、寂しさを感じなく

なる。中学生が身近な世界に人間的な絆を見いだせず、深夜放送のパーソナリティーとの虚構のふれあいにやすらぎを見いだすのも、メディアの中によりリアリティーのある人工的な友情を求めているからではないかと推測される。

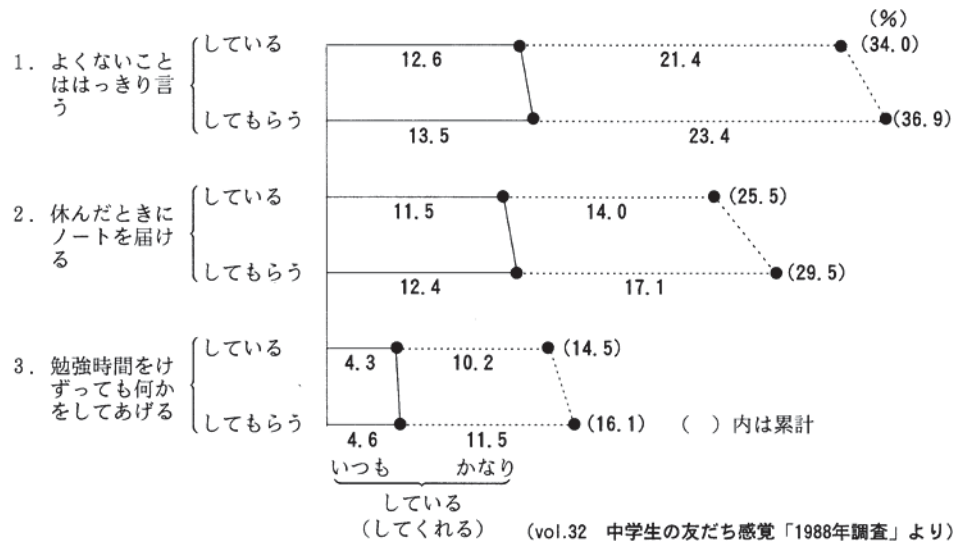
こうした異常な環境の中での成長は、中学生の友だち感覚を希薄なものとし、歪みを伴った変容として表れてくる可能性が高い。

図1-7 よい友だちとは



(vol.32 中学生の友だち感覚「1988年調査」より)

図1-8 友だちにしていること・してもらうこと



3) 成長のスタイルの再編に向けて

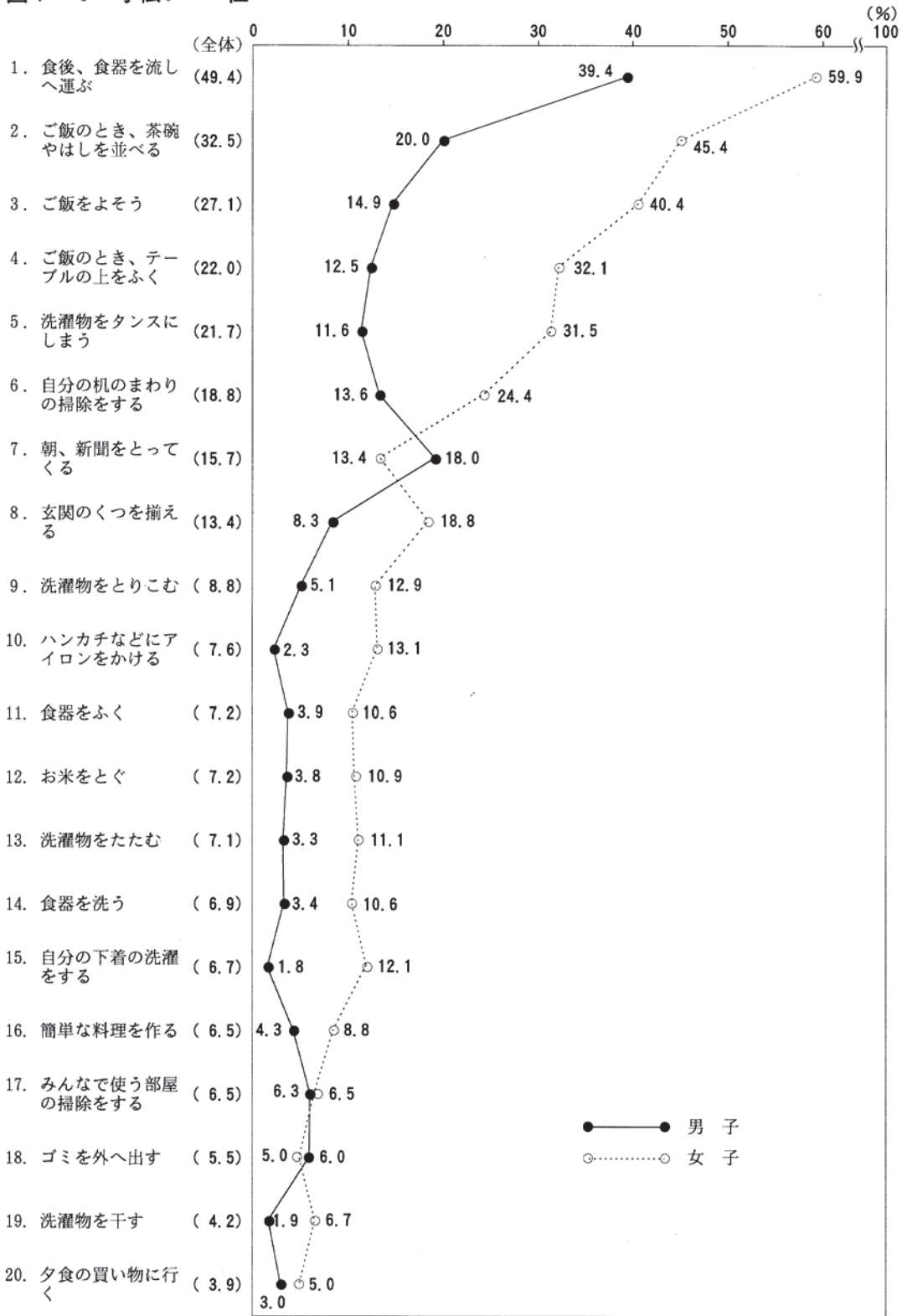
これまで述べたように、現代の中学生は、情報化・都市化といった生活環境の変化の中で、成長スタイルそのものにある種の歪みを伴っていることが明らかになった。今日の子どもたちが得るメリットはそのままに、かつての子どもたちが身近な家庭環境の中に自然に持っていた成長発達の課題やスタイルをとり戻すことはできないだろうか。

例えば、「食卓の風景」を思い浮かべてみよう。データにみるように、多くの家庭において、父親の帰りを待ち、家族そろって「いただきます」を言って食べ始めるといったルールや文化はすっかり崩れてしまった。図1-9によると、お手伝いでさえも「自分の食器を流しへ持っていく」を除くと、中学生

たちはほとんどしていない。男子よりも手伝う割合が多い女子でも「茶碗やはしを並べる」「ご飯をよそう」を「毎日のようにやる」が4割に達する程度で、「洗濯物を干す」「夕食の買い物」などは1割未満である。

中学生にとっての家庭は、サービスのよいシティーホテルのようである。「ご飯ですよ」と呼ばれて食卓につくと自分の好物が並んでいる。「ごちそうさま」を言って、食器を流しに運んだ後、すぐ自分の部屋に戻って再びテレビやマンガを見るか、勉強するという毎日のような生活である。こうした生活では、男子はむろんのこと、女子ですら身のまわりのことをせずにおとなになっていく恐れがある。そうしたことを避けるためにも、家の手伝いをさせ食事のマナーに気を配るなど、ごく身近なことから、中学生の成長のスタイルの歪みを正していく必要があるだろう。

図1-9 手伝い×性

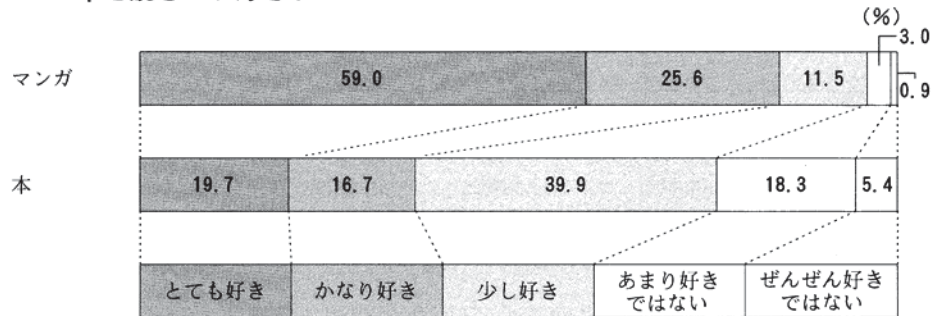


「毎日のようにやる」割合
(vol.26 中学生の食生活「1986年調査」より)

次いで、家庭での環境作りが大きな成果をあげるものの1つに「読書の習慣」がある。最近の生徒は本を読まなくなったといわれて久しい。図1-10は、中学生に「読書が好きか」を尋ねたものである。マンガが「とても

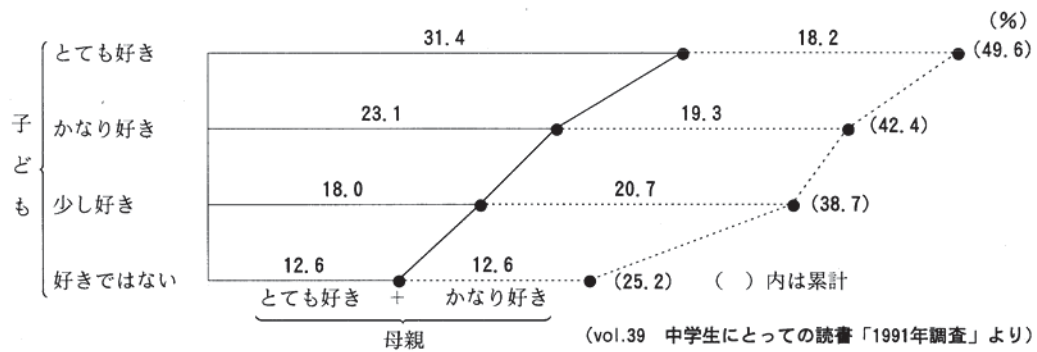
好き」と答えた者は59.0%と6割にも達するが、本を読むのが「とても好き」は19.7%と少ない。また、学年が上がっても読書量は増えるどころか、むしろ減少しているという気がかりな結果である。

図1-10 本を読むのが好きか



(vol.39 中学生にとっての読書「1991年調査」より)

図1-11 本人の本好き × 母親の本好き



(vol.39 中学生にとっての読書「1991年調査」より)

けれども、ホッとさせるデータもある。図1-11に示したように、本好きの母親から本好きの子どもが育っている。また、表1-3によれば、本好きの子は小さい頃、「本を買ってもらった」「童話などを読んでもらっ

た」「本屋に連れていってもらった」などの思い出を持つ者が多い。このように、家庭の読書環境が本好きの子どもを育てており、そうした意味では、本好きでない子を育てたのは、本人より家庭環境のあり様のように思わ

表1-3 本のしつけ × 本好き

(%)

	全 体	好 き			好きではない
		とても	かなり	少し	
1. 本を買ってもらった	31.4	51.3	> 33.5	> 27.0	> 18.0
2. 童話などを読んでもらった	23.0	38.0	> 21.5	> 20.4	> 12.4
3. 本屋に連れていってもらった	21.3	41.2	> 20.3	> 17.4	> 9.4
4. 寝るとき話をしてもらった	20.0	33.2	> 17.7	18.8	> 9.7
5. 映画(アニメ)に連れていってもらった	17.9	26.3	14.9	15.7	13.4
6. 図書館に連れていってもらった	8.8	20.7	> 9.7	> 5.7	> 1.2

「とてもよくしてもらった」割合
(vol.39 中学生にとっての読書「1991年調査」より)

れてくる。

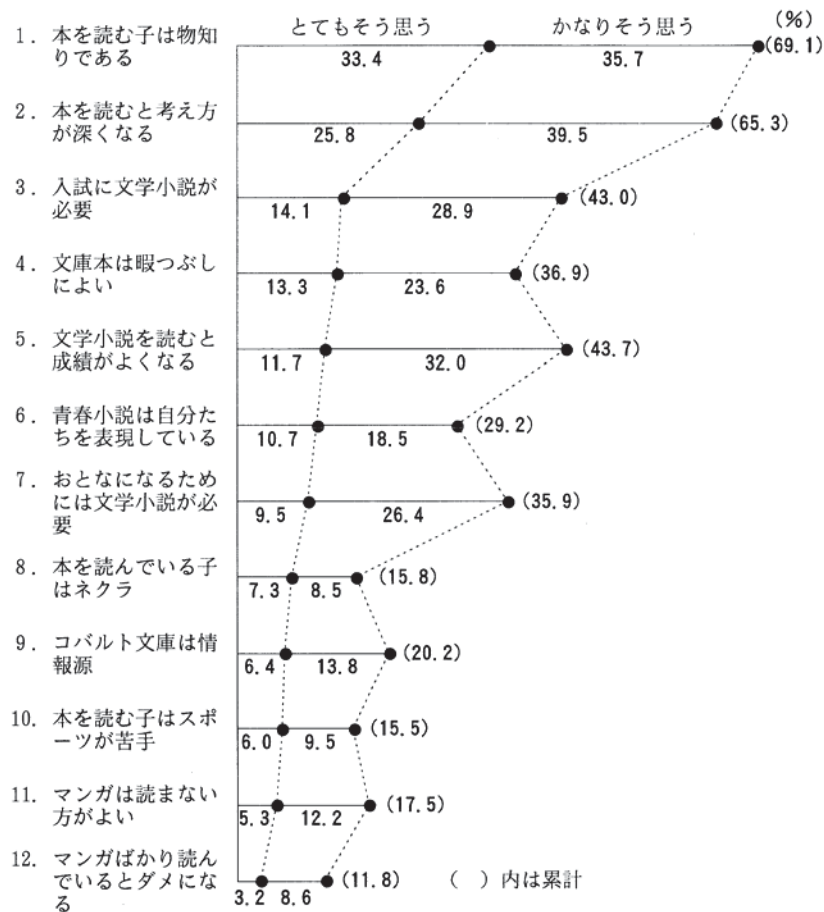
さらに、中学生の読書についての考え方を
 みてみよう。図1-12に示したように、7割
 近くが「本を読む子は物知りである」「本を
 読むと考え方が深くなる」とプラスイメージ
 を持って答えている。加えて、中学生で本を
 読むのが好きでない子は「あまり」「ぜんぜん」
 好きでないを合わせても2割にすぎない

(図1-10)。

したがって、環境さえうまく整えば、子ども
 たちの成長のスタイルに読書を組み込むこと
 はむずかしいことではなさそうである。

子どもたちが様々な体験を通し、自然の中
 での成長のスタイルが持てなくなっている現
 在、身近なところから成長の歪みを見直し是
 正していく必要性を感じる。

図1-12 読書についての考え方



(vol.39 中学生にとっての読書「1991年調査」より)

第2章 学校



1. 中学校をめぐるこの10年の動き

この10年間の出来事をふり返ってみると、バブル経済が膨らみ、やがて弾けたことがまず思い起こされる。その一方で、中学校をめぐる一連の教育問題が噴出し続けたことは注目されてよい。中学校をめぐる問題が拝金主義の世相と無縁であったとは考えにくい。しかし、この両者を結びつける糸は複雑に絡み合っている。ここではその糸を手操るためにも、この10年間の中学校教育をめぐる動きを跡づけてみることにしたい。

1) 校内暴力からいじめ・登校拒否へ

1980年から1984年にかけては、校内暴力が社会問題化した時期である。文部省による1983年の実態調査によれば、7校に1校が荒れる中学校であったというから、全国的に蔓

延した教育病理現象だったのである。あの頃の中学生たちが今は20代の後半に達しているけれども、成人となった彼ら、彼女たちにとって校内暴力事件はどんな意味を持ったのであろうか。それがたとえ思春期の「暴走」であったとしても、教師たちは当時の出来事を生々しく記憶に残しているはずである。

この間、文部省は「荒れる教室」対策として相次いで通達や手引き書を発行し、その対処に苦慮していた。しかし、対処すべき問題は校内暴力のみでなく、いじめや登校拒否などの広範囲の問題行動を含むものであったので、教師たちも従来の取り締りによる生徒指導を強化するだけでは有効に対応しがたい面があることを感じていた。しかも、世論の中には、生徒指導の強化が生徒の攻撃性を内向化させ、これがいじめを増大させる間接的要

因になっていると指摘する声まで起こった。このような中で、都市部の父母を中心に、公立中学校への不信感が広がり、このことが結果的に私立中高一貫校や国立付属中学への進学期待を過熱していった。

2) 「ゆとりと充実」から個性重視へ

1984年、中曽根首相（当時）は、こうした教育問題を解決し、21世紀に向けた教育改革を推進するため、総理府に首相直属の臨時教育審議会を発足させる。1987年に提出された最終答申は、教育改革の柱として、①個性重視の原則、②生涯学習体系への移行、③国際化・情報化への対応を打ち出し、この路線に沿って今日まで様々な教育改革がなされてきた。1988年には教師の資質・力量を向上させるべく、初任者研修の制度化などを盛り込んだ教育職員免許法が改定される。また同年、文部省は機構改革によって社会教育局を改組し新たに生涯学習局を設置する。

90年代に入ると、教育改革の動きがさらに加速する。1990年に「個性を生かす教育の充実」をめざして新しい学習指導要領への移行措置がスタートする。これとあわせて1991年に指導要録が改訂され、教育評価の方式が従来のペーパーテスト中心の相対評価から、関心・意欲・態度を重視する絶対評価へ転換する。この頃から「新しい学力観」が提唱され、中学校では受験学力偏重から脱却する必要性が議論されはじめる。さらに、世論を分けたのは、1992年2学期から月1回、実施される学校週5日制をめぐる問題と、埼玉県の業者テスト問題が投げかけた進路指導への波紋である。こうして、「偏差値から個性値へ」のスローガンのもと、中学・高校教育の改革と高校入試制度の見直しが図られつつある。現在はまさにその過渡期とみることができる。

3) ダブルスクールの常態化と 問い直される中学教師の専門性

教育改革のこうした動きにもかかわらず、中学生とその父母が直面する高校受験の重圧にほとんど変化はみられない。内申書の重視は、逆にその重圧を増しているように感じられる。例えば、通塾率の上昇がこのことを示している。文部省の調査によれば、1976年に38.0%だった中学生の通塾率は、1985年に44.5%、1993年には59.5%、うち最高の中3は67.1%にそれぞれ達しているという。われわれの調査でも、都市部を中心にこの傾向が確かめられている。今や中学生にとって塾通いは日常化しつつある。

この現象をダブルスクールの常態化と呼ぶことにしたい。後に述べるように、塾の効用について中学生の多くが高校受験に役立ったことを高く評価している。もちろん、その評価は成績上位層の生徒たちの方で高い。子どもたちの塾への評価の中で、気にかかる点がある。最近、実施した『モノグラフ』の調査によれば、中学生たちは、学習指導ばかりでなくそれ以外の指導力の面でも、教師より塾の講師の方に軍配を上げるからである。塾の常態化が、教師の力量をみつめる子どもの目をかなり厳しくしている。このショッキングな評価は、中学教師の専門性とは何かを問い直すことになる。

本号では、こうした中学教師の専門性の内容を考えるためのデータを掲載している。脱偏差値が叫ばれる一方で、学校でとかく不足しがちな個別指導の充実が求められている。少子化時代を迎えて、学校も塾も教育サービスをより一層、向上させねばならない段階に入ったわけである。

4) 「ドーピング」教育の問題点と中学生の自信

スポーツ界で話題になったドーピングが、この10年で教育界にも波及してきたような印象を受ける。それは、早期教育の流行、「お受験」現象、中高一貫校への進学人気などに象徴される、より早期からの知育偏重の傾向をいう。こうした勉強の効率性のみを追求するだけの教育が、子どもの成長に必要な社会性や体験の意味を忘れさせてしまう。しかも勉強一本やりの生活は、子どもの選択ではなく親の選択であるところに、大きな問題がある。

「ドーピング」教育の後遺症は親から自立しようとする中学生の時期に現れやすい。勉強面でのちょっとした挫折がその引き金になる。これが、思春期の通過儀礼として乗り越えられると、やがて成長の記念碑というべき意義を持つ。しかし、そうでない場合、子どもたちは救われないかもしれない。その時の自信回復の鍵が、友人との間で豊かな人間関係を作れるかどうかである。このことは、生徒の8割近くが、中学3年間で得たものの第1に、同性の友だちをあげていることから推察される。中学時代における友人関係の重要性は、この10年間でもおそらく変化していないだろう。

5) 中学校の制度疲労と再生の道

教育改革の様々な試みにもかかわらず、中学校が抱える、いじめ、登校拒否、学業不振などの教育問題は解決されないばかりか、ますます深刻になりつつある。これらの問題は、教師たちがなしうる努力によって解決できる範囲を超えており、その点で、社会変化に取

り残された中学校制度の「疲労」を示している。6・3・3制のちょうど中間に位置する中学校が、わが国の教育制度の持つ矛盾を集約して抱え込んでいるのかもしれない。

日本の公立中学は果たして蘇るのか。この10年間に何度か問われた問題である。前期中等教育のあり方は、日本に限らず外国の教育改革の中でもいつも議論的となってきた。その理由は、義務教育の修了年限を何歳にすべきかという争点とも重なるからである。高校進学率が96.2%（1994年度）に達しているわが国で、中学校はその通過点にすぎなくなった。しかし、だからといって、中高一貫の教育制度を採れば、それで問題の多くが解決するわけでもない。当面は、高校入試制度の改革と教育課程の見直しを進めることになるだろうが、その際、これまでの中学教育の成果として引き継ぐべきところは発展的に継承することが必要であろう。

例えば、ホームルーム制は日本の教育伝統として教師たちの多くが支持している。しかし、ご本家アメリカのハイスクールでは個別学習制が浸透し、ホームルーム制はすっかり廃れてしまっているという。21世紀の教育を考えると、ホームルーム制は過去の遺物になっているかもしれないが、しかし、その優れた教育機能は何らかの形で継承しなければならない。このように、従来の中学校教育の遺産をもう一度、評価し直すことが、制度疲労を修復する確実な道だと思われる。

2. 中学生にとっての学校

1) 高校入試と塾

中学生にとって、高校入試は、学業成績はもちろん、部活動、非行、友だちづきあい、親子関係など、いろいろな側面において重要な意味を持っている。その高校入試についての生徒たちの気持ちを尋ねたのが表2-1で、次のように偏差値により異なっている。

偏差値	~44	入試は生まれてはじめての試験だった
	45~49	自分にあった勉強法を見つけておけばよかった
	50~54	入試に息ぬきも大切だと思う
	55~61	学習の積み重ねこそ学力を蓄えることになる
	62~	入試は自分を鍛えるチャンスだ

表2-1 高校入試について × 偏差値

(%)

	偏差値									
	~44		45~49		50~54		55~61		62~	
1. 勉強は集中してやるのが大切だ	41.1	35.6	42.4	42.2	47.7	40.3	53.8	37.6	62.2	26.9
	76.7		84.6		88.0		91.4		89.1	
2. 入試に息ぬきも大切だと思う	41.9	38.9	48.4	40.6	53.3	38.7	49.7	37.9	51.0	34.2
	80.8		89.0		92.0		87.6		85.2	
3. 自分にあった勉強法を見つけておけばよかったと思う	46.2	34.3	47.3	34.3	50.0	30.5	50.3	29.0	42.6	26.0
	80.5		81.6		80.5		79.3		68.6	
4. 学習の積み重ねこそ学力を蓄えることになる	29.1	41.7	31.7	49.6	38.7	43.6	46.2	39.8	43.3	39.1
	70.8		81.3		82.3		86.0		82.4	
5. 入試は生まれてはじめての試験だった	38.3	32.5	30.0	40.6	38.1	32.2	29.8	39.2	35.1	26.5
	70.8		70.6		70.3		69.0		61.6	
6. 入試とはあっけないもの、そんな気がする	23.0	29.7	28.4	32.8	30.7	35.8	30.7	37.5	38.6	29.0
	52.7		61.2		66.5		68.2		67.6	
7. 入試が終わった今は“天国”にいる気分である	24.0	28.5	24.3	32.7	30.7	27.4	25.5	29.8	28.0	24.3
	52.5		57.0		58.1		55.3		52.3	
8. 入試は自分を鍛えるいいチャンスだった	10.8	32.8	9.8	34.0	13.1	39.7	18.5	40.3	26.1	34.2
	43.6		43.8		52.8		58.8		60.3	
9. 入試は体験してみたらどうということではなかった	8.7	22.8	13.1	25.0	15.9	25.1	13.5	28.6	19.6	25.8
	31.5		38.1		41.0		42.1		45.4	
10. “高すぎる目標なんてない”と思っている	8.1	21.8	14.9	19.2	10.7	19.3	13.4	18.0	20.9	20.9
	29.9		34.1		30.0		31.4		41.8	
11. 部活動で鍛えられたことが入試でもエネルギーになった	5.6	21.9	7.2	20.3	10.9	26.9	11.0	20.7	12.6	22.2
	27.5		27.5		37.8		31.7		34.8	
12. 勉強は根をつめてやらなかったが、よかったと思う	8.9	21.9	6.1	21.6	9.0	24.0	10.0	20.3	16.0	18.5
	30.8		27.7		33.0		30.3		34.5	
13. 自分の立てた学習目標をやりとげることができた	3.4	10.9	4.3	11.3	3.4	19.8	3.0	23.0	8.6	23.7
	14.3		15.6		23.2		26.0		32.3	
14. “合格するまでは”と思って泣きながら勉強したこともあった	2.5	15.0	4.1	9.6	3.6	11.5	2.4	12.1	5.9	11.4
	17.5		13.7		15.1		14.5		17.3	

1~13=「そう思う」+「まあそう思う」割合
 14=「何回か」+「たまには」あった割合
 ○は最大値
 —は最小値
 (vol.30 高校進学「1988年調査」より)

また、成績下位層の生徒ほど、自分にあった勉強法を見つけられなくて、勉強に集中できず、学習の積み重ねが不十分で、学習目標をやりとげることができなかったようである。

そして、それらの課題を克服するために、親子ともに頼ろうとするのが、“塾”である。最近では高校入試と塾は切っても切りはなせない関係にあり、成績上位層の生徒ほど塾は役に立ったと考えている（図2-1）。私立高校の入試問題の中にはむずかしい問題も少なくなく、学校の授業だけでは対応しきれないのは事実である。学校の授業では、いろいろなレベルの生徒がいるから、あまりむずかし

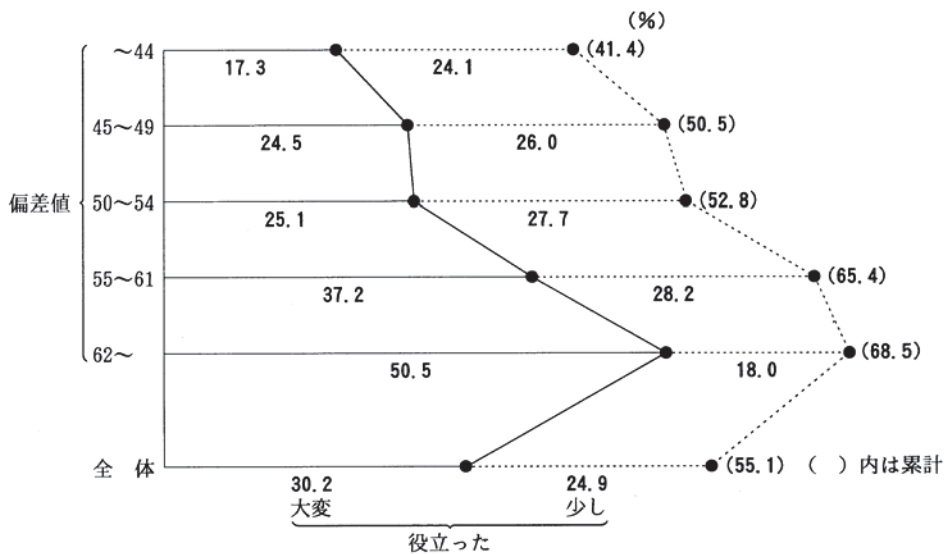
い問題を取り上げることはできない。したがって最近の傾向として、学校の授業をつまらなそうにしている生徒は成績上位層にもけっこういる。

一方、成績下位層の生徒は、塾に自分の意志ではなく、親に行かされている場合が多い。“やらされている”という意識があって授業にも身が入っていないので、塾は役立ったとは思えないのであろう。

それでは、生徒たちは学校と塾の授業をどう捉えているのであろうか。

図2-2は、数学の授業について比較したものであるが、残念ながらすべての項目で塾

図2-1 塾は役立ったか × 偏差値



(vol.30 高校進学「1988年調査」より)

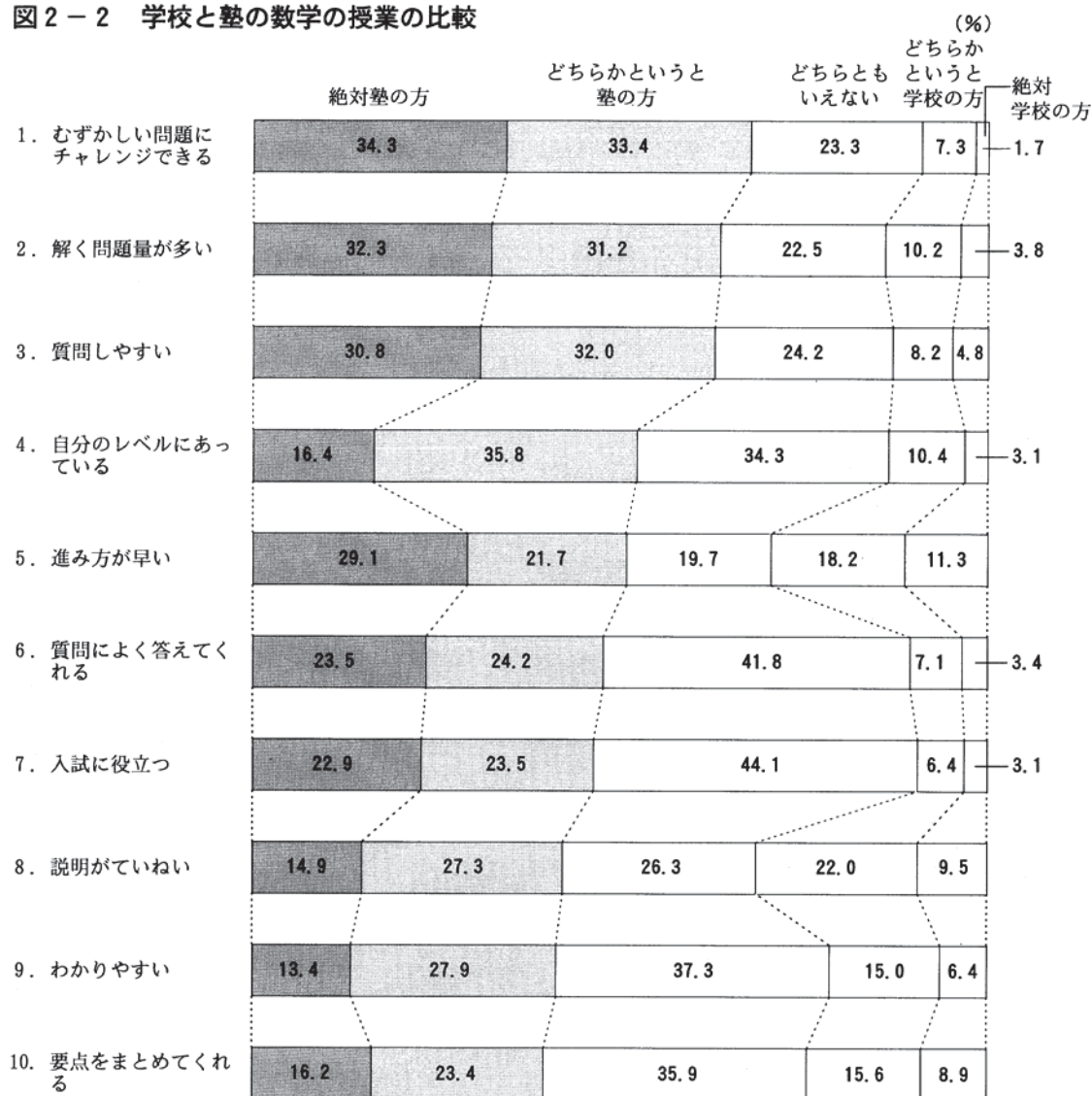
が学校を上回っている。塾は「むずかしい問題にチャレンジできる」「解く問題量が多い」「質問しやすい」「自分のレベルにあっている」「質問によく答えてくれる」という点で、かなりの支持を得ている。

塾に行くことについて、学校の先生も昔ほどあまりとやかく言わなくなってきているのは事実だが、生徒の様子を見てみると、塾の方が学校より先の内容を学習している、塾の宿題をやって学校の宿題をやらない、塾の宿

題があるという理由で委員会活動や部活動をさぼる、高校に合格するとまず塾の先生にあいさつに行くなど、“塾と学校の逆転現象”が起きているような気がしてならない。塾で一生懸命やって、学校は息ぬきの場となっているのである。

高校入試のことだけを考えると、どうしても塾に頼ってしまうのだろうが、このような中で学校はどんな役割を果たすべきなのだろうか。

図2-2 学校と塾の数学の授業の比較



(vol.48 教科観「1993年調査」より)

2) 学校の授業と学力

塾の授業を重視する生徒が多い中で、学校の授業についてはどのように考えているのであろうか。

表2-2は学校の授業の理解度を示したもののだが、中3の2学期で4分の1～3分の1

の生徒が、授業を「あまり・ほとんど」理解できていない。当然のことながら、成績下位層になればなるほど、その割合は増えていく。また、自分自身の学力の評価については、技能教科（音楽・美術・技術家庭・保健体育）は上位層にも下位層にもあまり差はみられないが、国語・社会・数学・理科・英語については、上位の生徒は自信を持っていても、下

表2-2 授業の理解度（中3の2学期）

(%)

	理解できている			理解できていない	
	全部	だいたい	半分くらい	あまり	ほとんど
国語の授業	5.2	46.2	34.0	10.5	4.1
社会の授業	5.9	28.0	32.2	25.2	8.7
数学の授業	9.3	35.9	30.3	18.2	6.3
理科の授業	5.8	27.6	31.7	25.1	9.8
英語の授業	10.7	26.9	29.4	18.9	14.1

○は最大値
(vol.33 学業成績の意味「1989年調査」より)

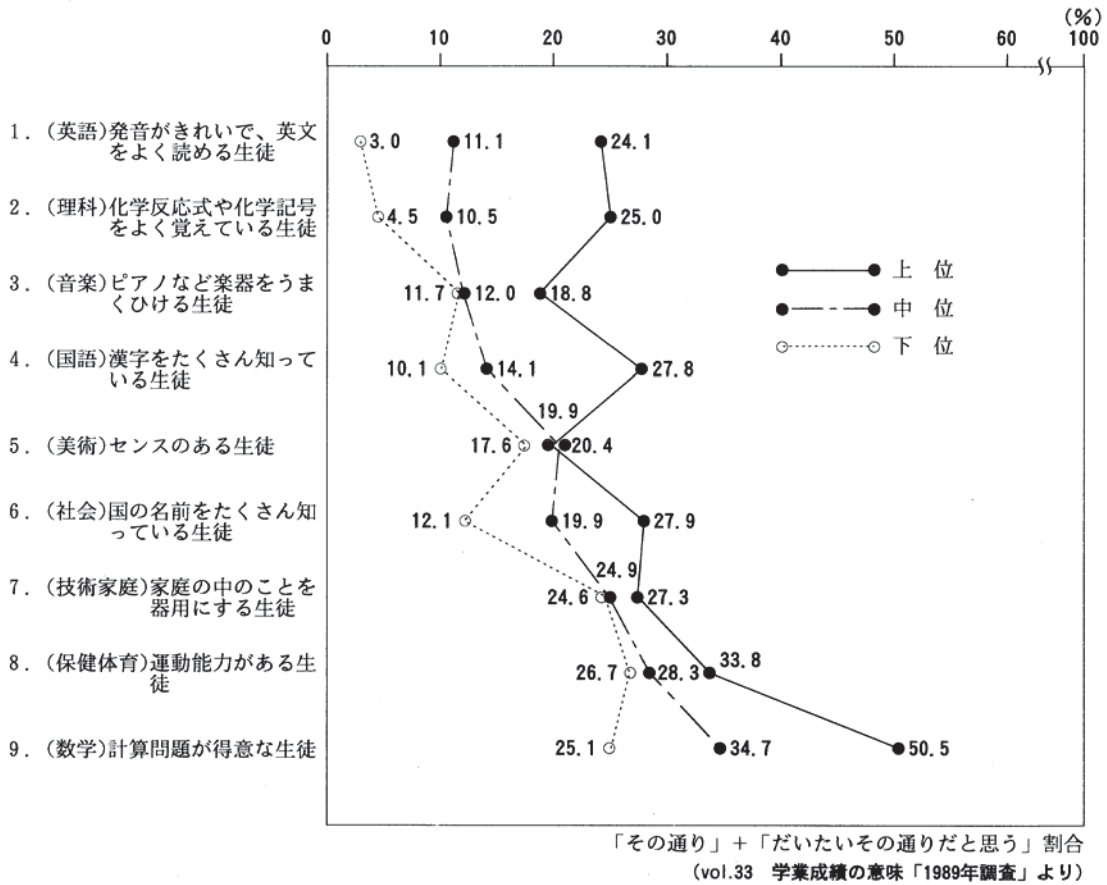
位の生徒になるほど自信が持てないようである(図2-3)。

その中で、理科の授業に対してどのように考えているかをまとめたのが、表2-3である。生徒たちは「実験や観察があるので楽しい教科だが、学習内容が多すぎて頭の中が混乱してしまう」という。実験や観察を通した学習内容であれば、それなりのインパクトを

持って学習効果が期待できるが、直接的な経験の伴わない学習では、ただ結果としての知識を覚えるだけになってしまうから、その知識量の多さによって頭の中で混乱が起こるのもしかたがないのかもしれない。

実験や観察は塾ではほとんどやらないはずであるから、学校の授業こそどんどん取り入れるべきなのだろうが、必ずしもその通りに

図2-3 学力の評価 × 成績の自己評価



はなっていない。週5日制の導入に伴って授業数は減少しているにもかかわらず、カリキュラムは変わらないため、実験や観察をけずって知識をつめ込む授業が多くなっている。どの教科もじっくりゆっくりと考えたり悩んだりする時間がない。果たして、これでよいのであろうか。入試のことだけを考えると、

短い時間にたくさん解く力をつけるのはいいことなのだろうが……。

次に、塾と学校の授業の違いの1つに“能力別クラス編成”があげられる。公立学校の授業ではほとんど取り入れられていないが、生徒たちはどのように考えているのだろうか。

表2-4は能力別に分けて数学の授業をし

表2-3 理科に対する生徒の考え方

(%)

		そう思う			小計
		とても	わりと	やや	
肯定的な考え方	1. 世の中に出てから知識として役立つ	4.9	12.6	26.8	44.3
	2. ものの見方、考え方がしっかりする	4.4	11.1	32.9	48.4
	3. 新聞を読んだり、テレビのニュースを見るときの基礎知識となる	5.9	15.9	32.8	54.6
	4. 国際社会に生きていくために必要な知識だと思う	3.2	5.3	23.0	31.5
	5. 家庭生活に役立つ	4.2	10.4	29.6	44.2
	6. 実験や観察があるので楽しい教科である	20.6	28.3	26.7	75.6
否定的な考え方	7. 他の教科よりも気楽な気持ちで授業が受けられる	8.6	17.8	24.4	50.8
	8. 高校や大学の受験以外には役に立たない	9.7	13.6	24.3	47.6
	9. 高校入試の受験科目でなければ楽しい教科である	12.8	15.8	21.9	50.5
	10. 学習内容が多すぎて、頭の中が混乱してしまう	22.2	19.3	30.6	72.1

○は最大値
(vol.48 教科観「1993年調査」より)

てほしいかどうかを、成績別にあらわしたものである。「ややそう思う」を入れると、全体の約半数の生徒が肯定的だが、中でも成績の上位層と下位層の生徒はその思いが強い。学校ではいろいろなレベルの生徒がいるから、だいたい中位層にあわせた授業になってしまい、上位層の生徒にとっては「やさしすぎ

てつまらない」し、下位層の生徒には「むずかしくてついていけない」のである。したがって、塾と同じように能力別に分けてほしいという思いが強くなるのであろう。

表 2-4 能力別に分けて授業をしてほしい × 数学の成績

(%)

		とてもそう思う	わりとそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない
数学の成績	上	22.3	14.9	12.8	34.0	16.0
		37.2			50.0	
	中の上	10.5	15.1	15.5	35.5	23.4
		25.6			58.9	
	中	9.8	14.2	24.5	30.8	20.7
	24.0			51.5		
	中の下	13.5	19.6	23.2	28.6	15.1
	33.1			43.7		
	下	24.4	16.0	21.6	21.6	16.4
	40.4			38.0		

○は最大値
(vol.48 教科観「1993年調査」より)

3) 学力以外に身につけたもの

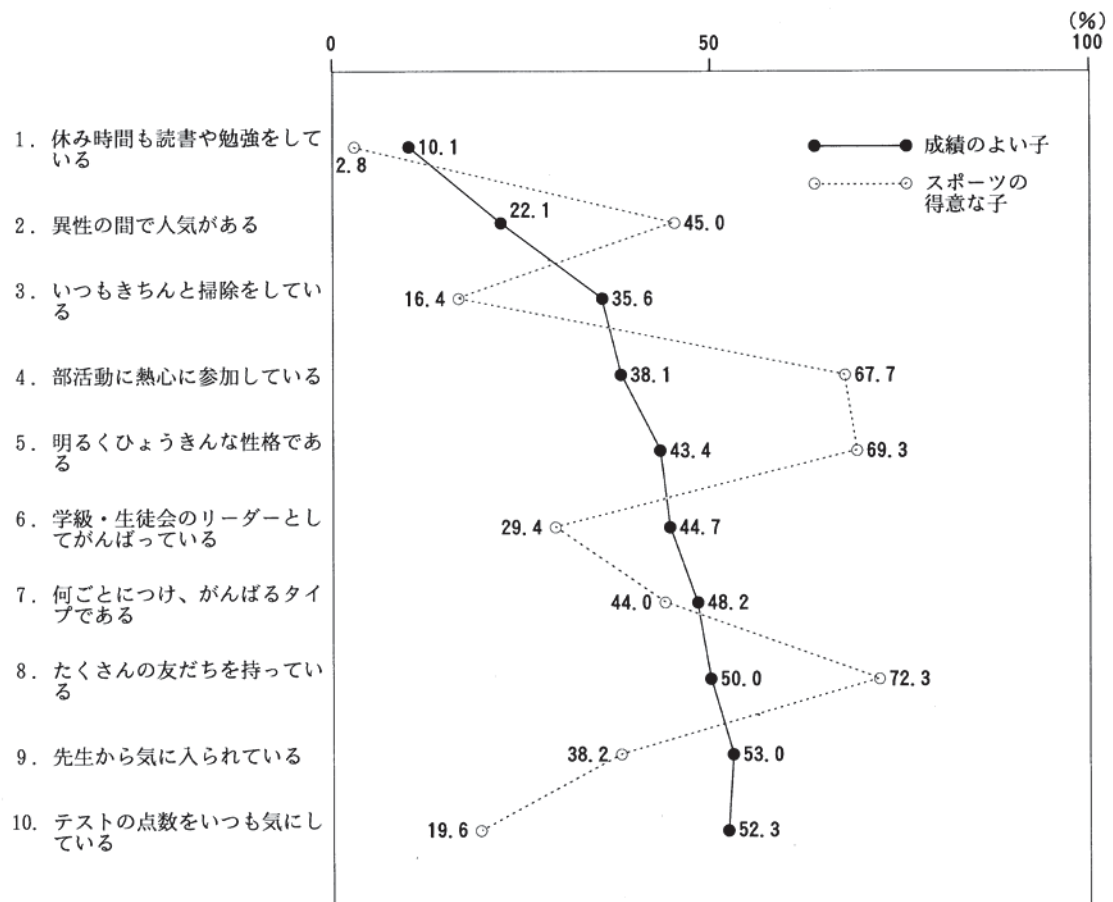
高校入試のことを考えると、学力を伸ばすことが一番大切に思えるわけだが、勉強以外のことについては、どう考えているのであ

うか。

図2-4と図2-5は、成績のよい子とスポーツの得意な子の評価と未来像についてまとめたものである。

スポーツの得意な子は、友だちが多く、明るくひょうきんで、部活動に熱心である。そ

図2-4 成績のよい子とスポーツの得意な子



「とても」+「かなり」そう思う割合
(vol.33 学業成績の意味「1989年調査」より)

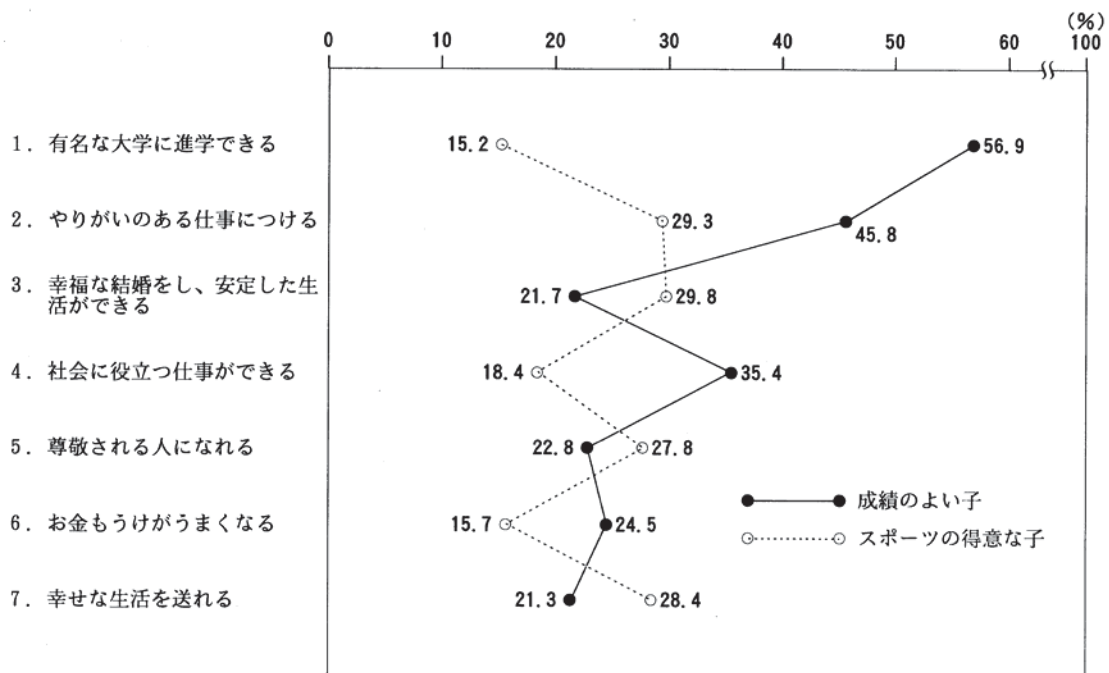
して将来は安定した幸せな生活を送ることができるであろう。しかし、有名な大学に進学したり、社会に役立つ仕事はできない。また、お金もうけもうまくいかない。

それに対して、勉強の得意な子は、テストの点数をいつも気にしている。そして、いつ

もきちんと掃除をしていて、学級や生徒会のリーダーとしてがんばっている。先生から気に入られている。将来は有名な大学へ進学し、やりがいのある社会に役立つ仕事につけるであろう。

この評価と未来像をみると、生徒たちはど

図 2 - 5 成績のよい子とスポーツの得意な子の未来像

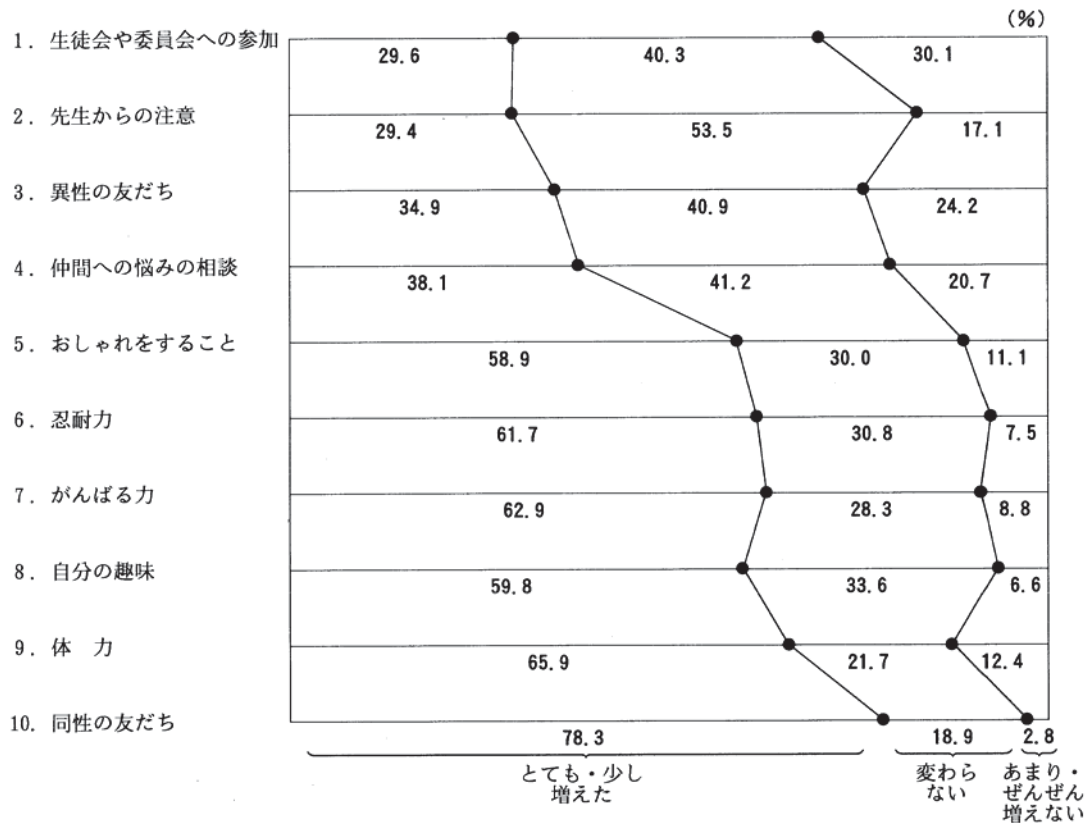


「とても」+「かなり」そう思う割合
(vol.33 学業成績の意味「1989年調査」より)

ちらかという“勉強の得意な生徒になりたい”という願望が強いようである。しかし、学校ではスポーツの得意な生徒も生き生きとできるような教育をやっていく必要があるのではないだろうか。

図2-6では、中学校の3年間で学力以外にどのような力がついたかをあらわしている。友だちが増え、体力がつき、がんばる力がついて、忍耐力もついたようである。そして、いろいろな力がどこで身についたかをみると

図2-6 3年間の変化



(vol.33 学業成績の意味「1989年調査」より)

(表2-5)、友だちとのふれあいを通して身についたり、部活動や学校での生活などを通して身についたものが多い。これらは、塾ではなかなか身につかないものであり、学校は学力以外に生徒たちを成長させる様々な力を

つける重要な役割を担っているということがいえよう。

表2-5 どこで身につけたか

(%)

	学 校	友だち	部活動	塾	家庭生活	その他
1. 知らない人とも話ができ、仲よくなれるようになった	3.1	55.1	10.0	9.9	4.3	17.6
2. 自分の考えを相手に正確に伝えられるようになった	7.8	62.7	5.6	2.0	9.7	12.2
3. いやなことでも最後までやりぬくことができるようになった	13.2	20.0	28.3	8.8	7.4	22.3
4. 知らないことにも進んで取り組むことができるようになった	16.8	31.3	14.4	8.1	8.5	20.9
5. 班長などリーダーになり、ものごとを指導できるようになった	18.1	31.1	14.6	1.2	2.7	32.3
6. 計画したことを実行できるようになった	20.3	17.6	8.8	10.1	15.8	27.4

○は最大値

(vol.33 学業成績の意味「1989年調査」より)

3. 教師の悩みと指導力

高校入試、塾、そして生徒の実態がどんどん変化していく中で、学校の教師はどんなことで悩み、そしてこれからどうしなければならぬと考えているのだろうか。

表2-6は教師としての悩みをまとめたものである。全体的には「忘れ物をする生徒が多い」「学力差が大きくて授業がやりにくい」「授業時数が足りない」「授業の準備が十分に

できない」など、授業に関する悩みが多い。塾では能力別のクラス編成や、生徒の実態にあわせたカリキュラムや教材の準備など、ほとんど解決できる問題なのだが……。年代別で見ると、若い教師ほど授業に関する悩みが大きくなっている。一方、ベテランになるにつれて、授業はなんとかなるが、生徒についていけなくなるようである。

表2-6 教師としての悩み × 年代

(%)

	全 体	年 代			
		～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳～
1. 授業時数が足りない	51.7	51.0	49.1	45.7	34.8
2. 忘れ物をする生徒が多い	66.0	67.3	65.1	62.2	67.9
3. 校務分掌の仕事が多い	51.7	51.4	53.8	46.8	53.3
4. 学力差が大きくて授業がやりにくい	57.4	63.7	57.7	53.5	55.9
5. 部活動の指導が負担	34.8	44.7	35.2	26.7	33.6
6. 授業の準備が十分にできない	46.3	52.6	47.4	44.4	39.6
7. 問題の生徒に手を焼いている	36.6	40.4	34.0	37.8	37.3
8. 自分の教育観とのズレ	26.0	29.2	30.5	22.2	18.0
9. 同僚の教師とのトラブル	13.4	11.9	19.2	12.4	4.2
10. 生徒がしらけている	29.2	28.4	33.5	26.7	23.8
11. 教師に向いていない	18.8	25.5	19.8	16.2	13.1
12. 指導の甲斐がない	24.3	22.8	22.7	28.2	24.4
13. 生徒が騒々しい	14.1	15.9	13.3	14.1	14.2
14. 保護者との煩わしさ	16.3	20.0	19.1	10.8	13.3
15. 周囲に認められない	10.8	11.9	13.3	10.8	4.8
16. 生徒の考えについていけない	22.0	14.1	18.9	25.3	31.9

「とても」+「かなり」感じている割合

○ は最大値

— は最小値

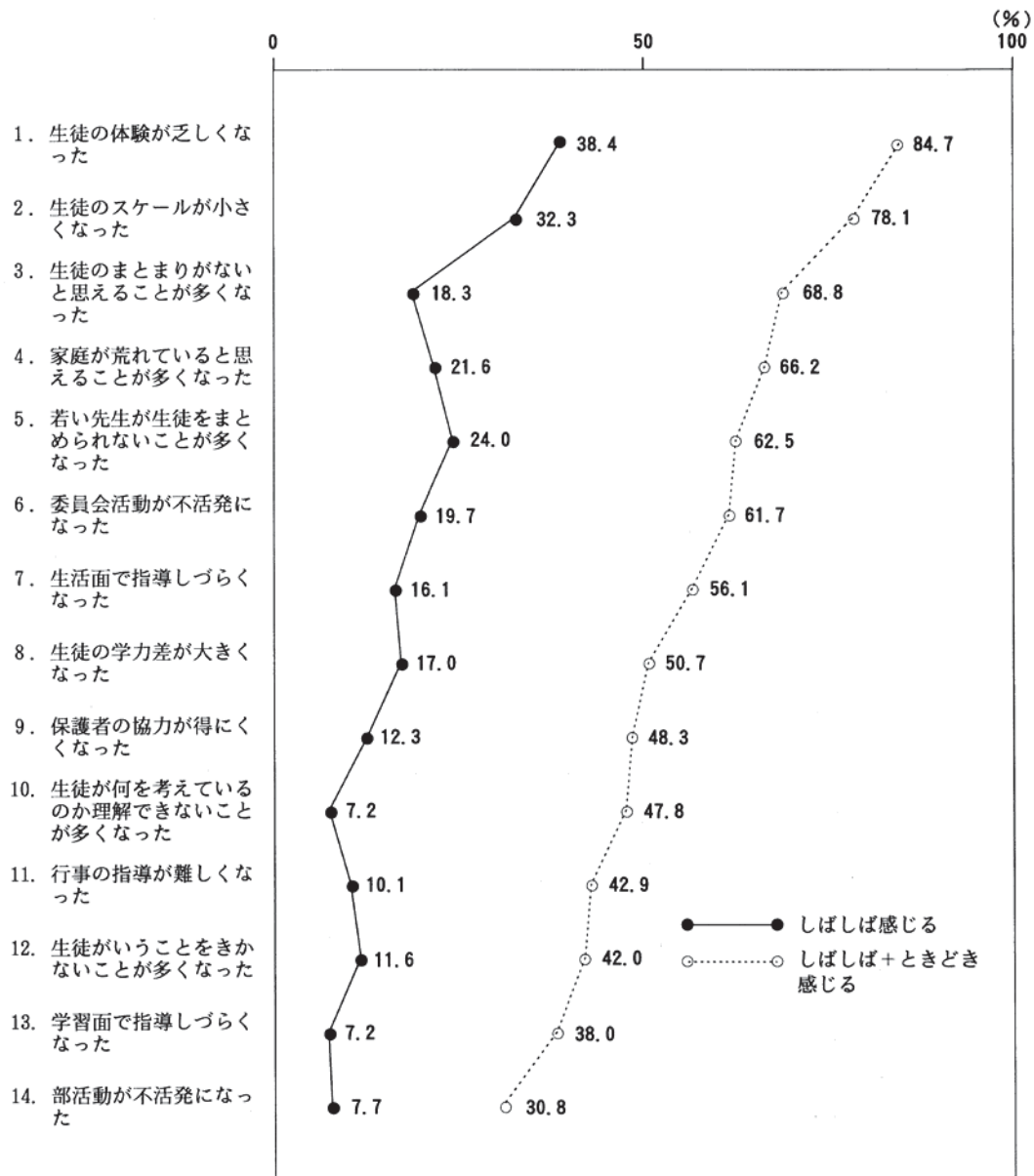
(vol.40 教師たちの生活と意見「1991年・教師調査」より)

そして、その生徒もどんどん変化してきている。10年前と比較した生徒の実態をみると(図2-7)、生徒は「体験が乏しくなった」「スケールが小さくなった」のであるが、体験はなくても知識は豊富なのであろう。限られた時間でカリキュラムを消化しなければ

ならない、また入試のためには点数さえ取ればよいという生徒が増えている点など、これから考えていかなければならない課題が多い。

そして、これから何に力を入れたいかという(図2-8)、ほとんどの教師が「授業をわかりやすくしたい」「学級活動を活発に

図2-7 10年前と比較した生徒等の実態



(注) この設問は、教職経験10年以上の人にも回答を求めている。そのため、非回答者と無回答者を除いたうえで、%を算出している。

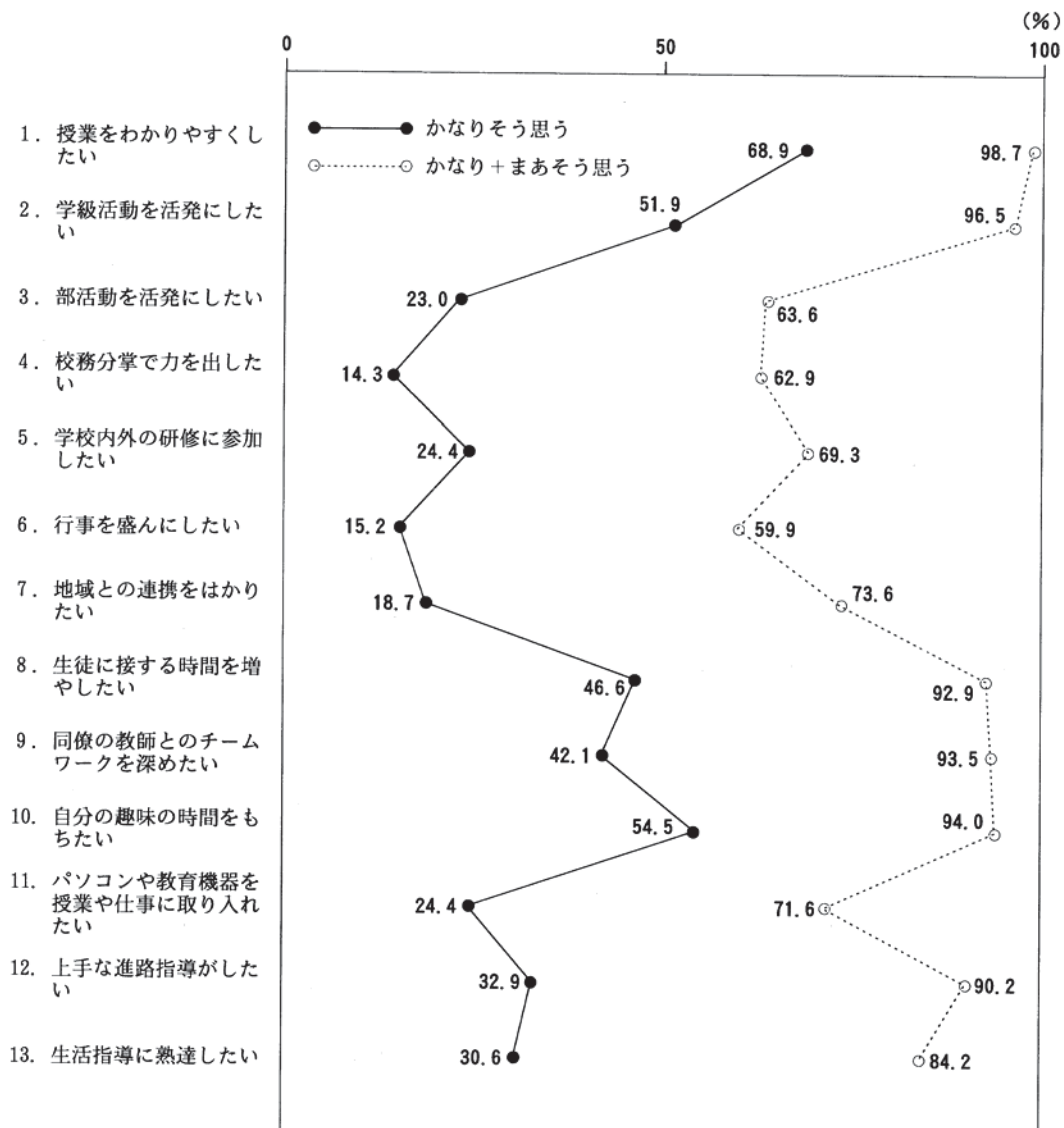
(vol.47 教師の指導力「1993年・教師調査」より)

したい」と考えている。これまで述べてきたように、授業に関しては様々な要素がからんできて、ただ単に教師の指導力を高めるだけでは解決できない問題である。しかし生徒たちに学力以外の力もつけていく意味で、学級活動にはもっと力を入れていく必要があると考えている。

教師として必要な力としては（図2-9）、

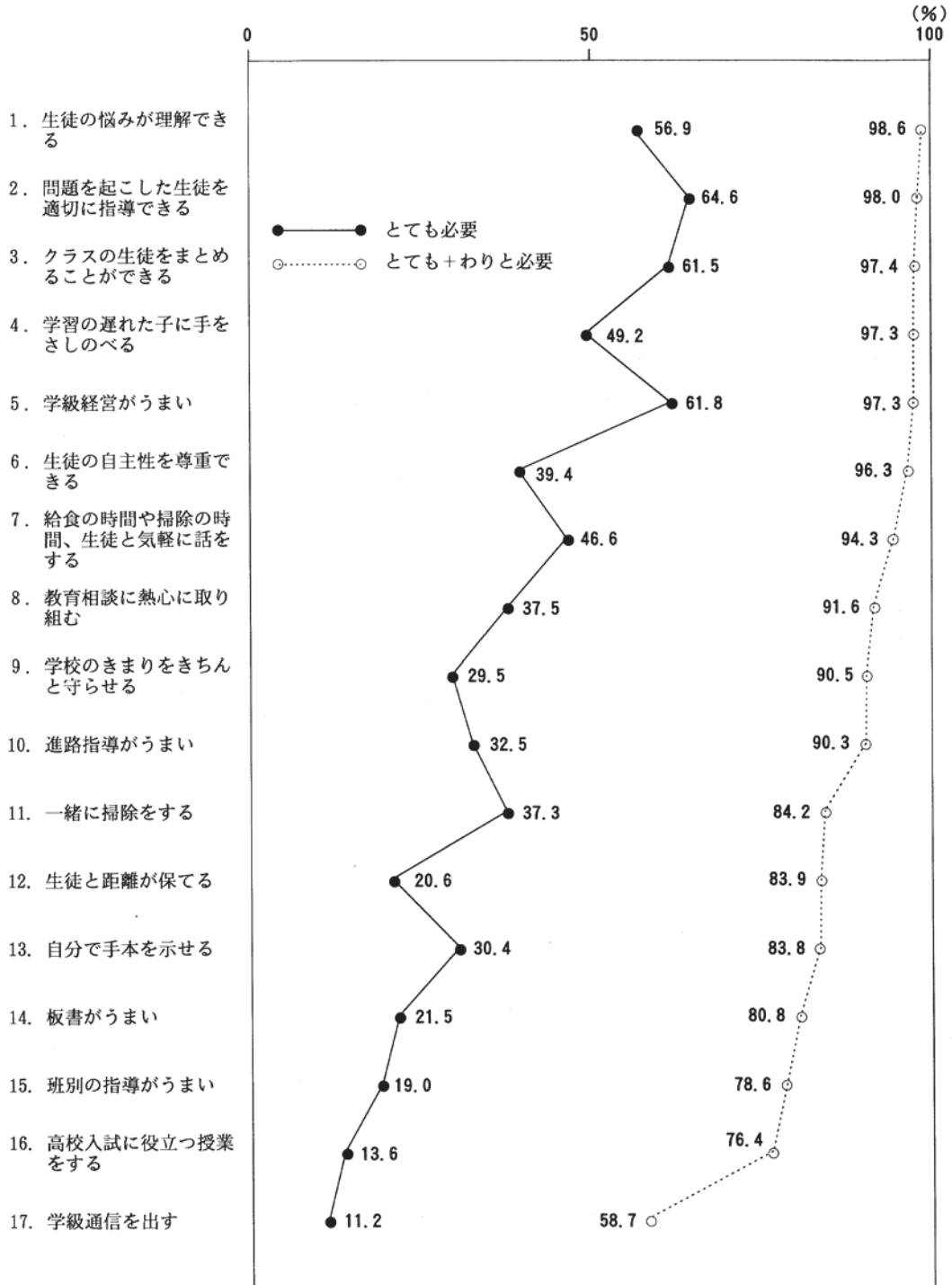
「生徒の悩みが理解できる」「問題を起こした生徒を適切に指導できる」「クラスの生徒をまとめることができる」などがあげられる。授業をしっかりとって学力をつけさせると同時に、生徒たちを人間として成長させるために、教師も幅広い力をつけていかなければならない。

図2-8 これから何に力を入れたいか



(vol.47 教師の指導力「1993年・教師調査」より)

図2-9 教師として必要な力



(vol.47 教師の指導力「1993年・教師調査」より)